

fig. 218 第3遺構面(弥生時代前期)平面図

第3遺構面 弥生時代前期の環濠と柱穴群、不定形土坑3基、自然流路3条を検出。

S D301 調査区中央を南西から北東方向へ縦断し、中央やや北東寄りで東方向へ湾曲している。調査区の東端で南東へ方向を振り、調査区外へ延びる。

規模は、幅は3~4mで、深さは約1.4mである。断面はU字形である。埋土は別添の断面図のとおりである。第1・2トレーニチからの観察によれば、南西壁と北東壁では土層の堆積状況は違っている。南西壁では一度形成された堀が埋まった後、再び掘り込まれている様子が窺える。

出土遺物は、第3・5層から弥生時代前期の土器が多量に出土しており、土器等の廃棄埋土である。北東壁では埋土は粘質の土層が殆どであり、周辺からは多量の木器（杓子・石斧の柄・鉢等）・木片・獸齒・種子・木玉？等が出土し、木器溝つまりを形成している。また、埋土中からは土器・木器類の他に、石臼？や石斧・石棒？等が出土している。

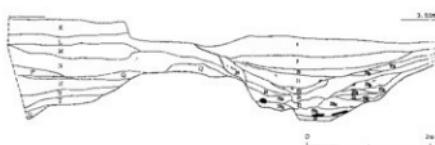
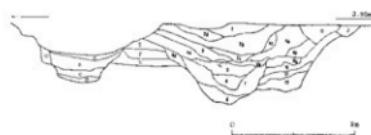


fig. 219 横断面図

1. 青瓦色シルト質粘土。物置土器・骨少量混入
- 2.a. 青瓦色シルト質粘土。マシン瓦
- 2.b. 角灰色シルト質粘土。物置土器・瓦残存
- 2.c. 青瓦色シルト質粘土。鏡形土器・骨少量混入
3. 黄褐色シルト質粘土。骨少量混入、人骨確認
- 4.a. 黄褐色中砂質粘土。骨多量混入
- 4.b. 黄褐色中砂質粘土
- 4.c. 黄褐色中砂質粘土。木片
5. 黄褐色中砂質粘土。物置土器・瓦残存、骨大発見、人骨確認
6. 黄褐色中砂質粘土。骨多量混入、褐色細粒ブロック含む
7. 黄褐色中砂質粘土。木片・骨・土器若干、土器少量混入
8. 黄褐色中砂質粘土。よくじき骨・骨器若干、土器少量混入
- 9.a. 黄褐色中砂質粘土。骨多量混入、褐色細粒ブロック含む
- 9.b. 黄褐色中砂質粘土

10. 青瓦色中砂。1m前後厚生  
青瓦色沙質層。上部砂礫层、下部  
中砂の主層
11. 青瓦色中砂。土器・食文化
12. 細砂化した層。土器・食文化
13. 細砂化した層。土器・食文化
- A. 黄褐色中砂質粘土
- B. 黄褐色中砂質粘土
- C. 黄褐色中砂質粘土。上部粗砂一部  
粗砂多く含む
- D. 黄褐色中砂質粘土。土器・食文化
- E. 黄褐色中砂質粘土。土器・食文化
- F. 黄褐色中砂質粘土。土器・食文化
- G. 黄褐色中砂質粘土。土器・食文化
- H. 黄褐色中砂質粘土
- I. 黄褐色中砂質粘土。土器・食文化
- J. 黄褐色中砂質粘土。土器・食文化
- K. 黄褐色シルト層
- L. 細砂化した層。土器・食文化
- M. 細砂化した層。土器・食文化
- N. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- O. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- P. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- Q. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- R. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- S. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- T. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- U. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- V. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- W. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- X. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- Y. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
- Z. 黄褐色中砂質粘土 (細粒)
22. 實質灰シルト。上層にはない  
含む砂礫層
23. 黄褐色中砂質粘土。土器・食文化
24. 細砂化した層。土器・食文化
- 25.a. 青瓦色中砂層。木片含む
- 25.b. 青瓦色中砂土。七器・食文化
26. 青瓦色中砂土。土器・食文化
27. 青瓦色中砂土。土器・食文化
28. 青瓦色中砂土。土器・食文化
- 29.a. 青瓦色中砂層。遺物含む
- 29.b. 青瓦色中砂層。2器より他の1
30. 青瓦色中砂層。土器・食文化
31. 青瓦色中砂層。土器・食文化
32. 青瓦色中砂層。土器・食文化
33. 青瓦色中砂層。土器・食文化
34. 青瓦色シルト。32よりやりや粘土質。木器・漆器等の付随的痕跡?
35. 青瓦色シルト



fig. 220 第3凍柵面（弥生時代前期）全景



fig. 221 犀塚 SD301



fig. 222 犀塚 SD301 木製品出土状況



fig. 223 犀塚 SD301 土層堆積状況

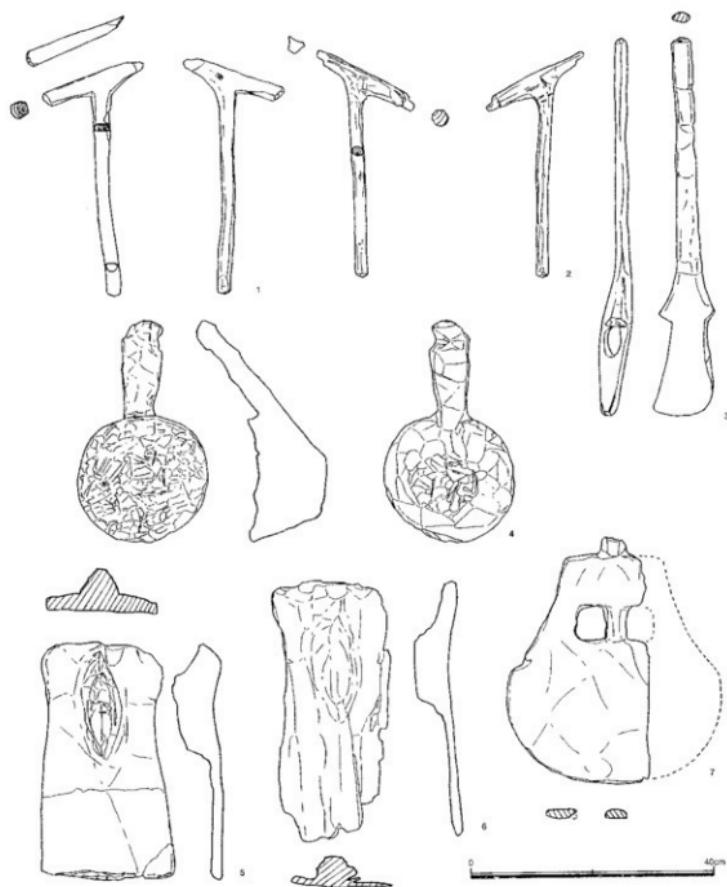


fig. 224 罹珠 SD301 出土木製品実測図

- (1 : 横斧柄未製品 (樹種: サカキ)  
 2 : 横斧柄 (樹種: サカキ)  
 3 : 褶斧柄 (樹種: アカガシ並種)  
 4 : 内未製品 (樹種: クスノキ)  
 5・6 : 広頭未製品 (樹種: アカガシ並種)  
 7 : 箸形鉢 (樹種: アカガシ亞属)

- S D 302 調査区南側で検出された。幅は約1.4m、深さは約0.7mを測る。東西方向に走ると考えられる。S D 301よりは古い流路で、S D 301に切られている。埋土からは遺物は出土していない。
- S D 303 調査区北端でS D 301の拡がりを見るために設定したトレンチ（第2トレンチ）で確認した。東西方向へ走ると考えられる。大半が調査区外で、幅、深さとも未定である。
- S D 304 調査区東部に位置する。南北の周壁付近では後世の削平によって消失しているが、断面に痕跡を伺えることが出来る。東に主軸を振りながら、南北方向に延びる。上面は後世の削平を受けたものもあるが、本来の形状は明らかではない。帯状の検出状況を勘案して、溝状造構として報告する。
- 外形は不定形で、溝の形状をよく止めている北半部では幅80cm・全長3.6mを測る。なお西肩部分が緩やかに大きく広がる。溝の深さは一定せず、最深部で55cmであった。レンズ状の堆積を呈する。溝の内部からは弥生土器のみが出土している。
- S X 301 調査区北西壁の中央やや西寄りで検出された。弥生時代前期の壺がほぼ1個体分出土した。
- S X 302 S X 301に接して検出された。弥生時代前期の壺の破片が出土した。壺形は径約0.8m、深さ約0.1mでほぼ円形を呈している。S X 301と同一の遺構の可能性も考えられる。
- S X 303 調査区の北西隅付近で検出された。径2.5m前後のほぼ円形を呈している。S X 303内のピット状造構は、径約0.8m、深さ約0.2mの円形を呈している。遺物は若干の弥生土器が出土した。時期は弥生時代前期である。
- S P 1・2 S D 302の西側でピット2基を検出した。北から1、2と仮称した。それぞれ半蔵して堆積状況を観察したが、柱穴の痕跡は確認できなかった。S P 1は直径29cmの正円形で、深さ33cmを測る。埋土は茶褐色シルト質細砂のみで構成される。埋土からは、弥生土器と考えられる土器の破片が出土した。部位等はわからない。S P 2は直径21cm、深さ25cmを測る。正円形を呈し、埋土は茶褐色シルト質細砂のみで、遺物は見られなかった。

### 3.まとめ

今回の調査では、第3遺構面での弥生時代前期の環濠の検出が特筆できるものである。環濠は調査区中央を縱断し、途中で東方向へ湾曲しながら調査区外へ延びている。大開跡第1次調査で確認された環濠とはほぼ100mほど離れた地点での検出であり、新たな環濠集落の可能性も考えられる。

また、第3次調査で確認されたS D 201との関係は今後も検討しなければならない課題である。今後周辺地区では環濠の展開が留意されよう。

## 大開遺跡第7次調査出土木製品等の樹種同定分析

1. はじめに 神戸市兵庫区大開通にある大開遺跡第7次調査で出土した木材について調査した。今回調査した木製品は、S D 301に付属する遺物で、調査区中央を南西から北東方向に継断する幅、3~4m、深さ約1.4m、断面U字形の環濠周辺から農耕具やその未製品等が多く出土している。年代は、弥生時代前期と考えられる。

これらの木材を同定することにより、当時の木材利用を明らかにすることを目的として調査した。

2. 方法と記載 同定には、木製品から直接、もしくは切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・写真図版a）、接線断面（板目と同義・写真図版b）、放射断面（柾目と同義・写真図版c）の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラーにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版を添付し、同定の証拠とともに同定根拠を後述する。結果は、表1大開遺跡第7次調査の樹種同定結果に示す。なお、作成した木材組織プレパラートは、（株）パレオ・ラボで保管されている。

## 同定概要

モミ属 *Abies* sp. PINACEAE

写真図版1a~1c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材の移行は緩やかで、年輪界は明瞭。放射組織は柔細胞のみからなり單列。その水平壁には单穿孔が多く数珠状を呈す。分野壁孔はきわめて小型で、1分野に1~4個程度。

以上の形質より、マツ科のモミ属の材と同定した。いずれも常緑高木の針葉樹である。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. PINACEAE

写真図版2a~2c

水平・垂直両樹脂道とともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端に放射仮道管があり、水平壁には鋭角な鋸歯状の肥厚が著しい。分野壁孔は大型の窓状で、1分野に1~2個。

以上の形質から、マツ科のアカマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、北海道~屋久島の温帯~暖帯にかけて分布する。

クロマツ *Pinus thunbergii* Parlatoe PINACEAE

写真図版3a~3c

水平・垂直両樹脂道とともに持つ針葉樹。樹脂道の周囲にはエピセリウム細胞が見られる。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。放射組織は、放射柔細胞と放射仮道管と放射樹脂道からなり、単列と紡錘形のものがある。放射組織の上下端にある放射仮道管の水平壁の鋸歯状の肥厚がアカマツと比較して鋭利でないことで区別した。分野壁孔

は大型の窓状で、1分野に1～2個。

以上の形質から、マツ科のクロマツの材と同定した。常緑高木の針葉樹で、青森県以南～琉球の主に海岸沿いに分布する。

#### ツガ属 *Tsuga* sp. PINACEAE

写真図版4a～4c

垂直・水平両樹脂道のいずれも欠く針葉樹材。早材から晩材にかけての移行はやや急で、晩材部の量は多く、年輪界は明瞭。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管からなり、單列。放射組織の上下端に放射仮道管を持つ。放射柔組織の水平壁には單穿孔が著しく数珠状を呈す。分野壁孔はごく小窓のトウヒ型で1分野に1～4個存在する。

以上の形質により、マツ科のツガ属の材と同定した。ツガ属にはツガとコメツガ2種が含まれるが、いずれも常緑高木の針葉樹である。

#### コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc. SCIADOPITYACEAE

写真図版5a～5c

水平・垂直両樹脂道と樹脂細胞を持たない針葉樹。早材から晩材にかけての移行はやや緩やか。放射組織は、単列ですべて放射柔組織から構成される。分野壁孔は小型の窓状。以上の形質により、コウヤマキ科のコウヤマキの材と同定した。コウヤマキは、本州（福島県隔離分布）～九州（宮崎）まで分布する常緑針葉樹である。

#### ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. CUPRESSACEAE

写真図版6a～6c

水平・垂直両樹脂道を持たない針葉樹。早材から晩材への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞が早材部と晩材部の境に接線状に散在しており、水平壁は結節状に肥厚している。放射組織は、放射柔組織のみからなり、単列。分野壁孔は中型のトウヒ～ヒノキ型で、1分野に1～3個。

以上の形質から、ヒノキ科のヒノキの材と同定した。ヒノキは、常緑高木の針葉樹で、福島県～屋久島の温帯に分布する。ヒノキ、サワラ両者の区別が曖昧なものについてはヒノキ属と同定した。

#### イヌガヤ *Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch CEPHALOTAXACEAE

写真図版7a～7c

水平・垂直両樹脂道と共に持たない針葉樹。早材から晩材にかけての移行は緩やかで晩材部は少ない。樹脂細胞が散在する。仮道管に顯著な螺旋肥厚が見られ、放射組織はすべて放射柔組織からなり単列同性。分野壁孔は1～2個のトウヒ型。

以上の形質により、イヌガヤ科のイヌガヤの材と同定した。イヌガヤは、常緑小高木～低木の針葉樹で、本州（岩手県以南）～九州に分布する。

#### シイ属 *Castanopsis* sp. FAGACEAE

写真図版8a～8c

大型で丸い道管が単独で、年輪界にまばらに間隔を置いて一列に並ぶ環孔材。晩材部では、徐々に径を減じた薄壁の多角の道管が火炎状に並んでいる。道管の穿孔は单一、木部柔組織は接線状。放射組織は単列同性。

以上の形質により、ブナ科のシイ属と同定した。シイ属には、スダジイとツップラジイが含まれており、いずれも常緑高木で、スダジイは福島・新潟県以西～屋久島まで、ツップラジイは関東地方以南～屋久島まで分布する。

**コナラ属クヌギ節 *Quercus* Sect. *Cerris* FAGACEAE**

写真図版9a～9c

年輪のはじめに丸い大道管が一列に並び、晩材部では徐々に径を減じた丸い道管が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は單一、放射組織は、複合放射組織と単列同性の物からなり、道管との壁孔は柵状。木部柔組織が、接線方向には帯状に分布する。

以上の形質により、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定した。クヌギ節は、いずれも落葉高木のクヌギ（岩手県以南～琉球）とアベマキ（山形県以西～九州）が含まれる。

**アカガシ亜属 Subgen. *Cyclobalanopsis* sp. FAGACEAE**

写真図版10a～10c

中型で厚壁の円形の道管が単独で、放射方向に幅を持って配列する放射孔材。道管の穿孔は單一。木部柔組織は1～3細胞幅程度の接線方向の帯状を呈す。放射組織は、単列同性で、時に複合状となる。放射組織道管間の壁孔は柵状を呈す。

以上の形質により、ブナ科ナラ属アカガシ亜属の材であると同定した。日本に産するアカガシ亜属には8種が含まれ、いずれも常緑高木。

**ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ULMACEAE**

写真図版11a～11c

年輪の始めに大型で丸い管孔が一列に並ぶ環孔材。晩材部で、薄壁の多角形の小道管が多数集合して接線方向～斜め接線方向に配列する。道管穿孔は單一、小道管内部には螺旋肥厚を持つ。木部柔組織は、周開状～連合翼状を呈し、放射組織は1～8列程度の異性で、その上下端は時に大きめの結晶細胞が見られる。

以上の形質により、ニレ科のケヤキの材と同定した。ケヤキは、本州～九州の暖帶～温帶の谷あい、斜面などの適調な肥沃地に広く分布する。材は、木目が美しく重硬で狂いが少なく、保存性が高い。

**ヤマグワ *Morus australis* Poir. MORACEAE**

写真図版12a～12c

年輪の始めに、大道管がならび、そこから順次径を減じた小道管が接線状～斜め接線状に配列する傾向を持つ環孔材。道管の穿孔は單一で、時にチローシスを含む。小道管は螺旋肥厚をもち、木部柔組織は周開状。放射組織は異性で、1～5細胞幅程度である。

以上の形質により、クワ科のヤマグワの材と同定した。ヤマグワは、高さ3～10mほどになる落葉低木で、分布は北海道～琉球で、温帶～亜熱帯の低山地の林内に生える。

**クスノキ *Cinnamomum camphora* (L.) Presl LAURACEAE**

写真図版13a～13c

中型で丸い道管が単独、あるいは2～3個複合して散在する散孔材。道管の周圍には顯著な刷毛状の柔組織をもち、時に大型の油細胞がある。道管の穿孔は單一。放射組織は、2細胞幅、10細胞高程度の異性。上下端の直立細胞にも大型の油細胞を持つ。

以上の形質から、クスノキ科のクスノキの材と同定した。クスノキは、本州・四国・九州の暖帯に生える常緑高木である。

ヤブツバキ *Camellia japonica* L. ; *Thea hozanensis* Hayata ; T. Nakai Hayata THEACEAE

写真図版14a～14c

小型の道管が単独、時に2～3個複合して年輪界に向かって径を減じながら散在する散孔材。道管穿孔は10～20本ほどの横棒からなる階段状で、木部柔組織は散在状。放射組織は異性で背は低く、2～3細胞幅。單列部分や直立細胞には、しばしば大型の結晶細胞が見受けられる。

以上の形質から、ツバキ科のヤブツバキの材と同定された。ヤブツバキは、青森県～琉球の暖帯に広く分布する常緑高木である。

サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ; *C. ochnacea* DC. ; *Sakakia ochnacea* (DC) Nakai THEACEAE

写真図版15a～15c

小型で多角の道管が単独もしくは複合して均一に散在する散孔材。道管の穿孔は、横棒の多い階段状、木部柔組織は散在状。放射組織は顯著な異性で單列、もしくは、一部で2列。道管と木部柔組織間の壁孔は対列状～階段状。

以上の形質によりツバキ科のサカキの材と同定した。サカキは、常緑の小高木で、本州(茨城・石川県以西)～九州に分布する。

バラ属 *Rosa* sp. ROSACEAE

写真図版16a～16c

年輪のはじめに中型の道管が1、2列並び、そこから徐々に径を減じた小型の道管が、単独でまばらに散在する環孔材。道管の穿孔は単一で、木部柔組織は短接線状。放射組織には6～9細胞幅で平伏細胞からなる背の高い複合状の放射組織と直立細胞からなる単列の放射組織がある。

以上の形質により、バラ科のバラ属の材と同定した。日本のバラ属には、ノイバラ (*R. multiflora*) 等の落葉・常緑の低木計15種が含まれる。

シャシャンボ *Vaccinium bracteatum* Thunb. ERICACEAE

写真図版17a～17c

小型で角張った管孔が均一に散在する散孔材。道管の穿孔は單一もしくは、数本の横棒からなる階段穿孔で、内壁には螺旋肥厚が見られる。放射組織は1～8細胞幅程度の背の高い複合放射組織で、細胞の大きさが不均一である。

以上の形質から、ツツジ科のシャシャンボの材と同定した。シャシャンボは、関東・中部南部・近畿以西の暖帯に分布する常緑低木。

ケンボナシ属 *Hovenia* sp. RHAMNACEAE

写真図版18a～18c

年輪界に中～大型の道管が並び、晚材部では厚壁の道管が単独もしくは2～数個放射方向に複合して散在する散孔材。道管穿孔は、單穿孔。木部柔組織は周囲状～連合糸状。放

射組織は異性で1~4細胞幅程度、比較的外形は滑らかである。

以上の形質からクロウメモドキ科のケンボナシ属の材と同定した。日本に自生するケンボナシ属には、ケンボナシ（北海道～九州）とケケンボナシ（本州～四国）が含まれ、いずれも落葉高木である。

### 3. 考 察

今回調査した製品は、斧柄、鎌・鋤、削材等の製品と未加工木がある。結果は、表2に示す。樹種毎に集計した結果は表1に示す。

まず、斧柄であるが、計5点の調査点数であったが、縫斧では、アカガシ亜属材が使用されているのに対し、横斧・木製品では、サカキが使用されており、全く違う樹種が使用されている。大阪府の池上遺跡でも佐賀県の菜畑遺跡でも、同様に直柄がアカガシ亜属、膝柄にはサカキが最も多く使用されている（山田1993）。サカキが分布する地域の樹種同定結果では、この傾向が強く、樹種の違いが使用形態、製品の形態の違いを反映しているとも考えられる。

鎌・鋤は、いずれもアカガシ亜属である。全国的に農具には硬いアカガシ亜属材が使用される傾向があり、本遺跡もその類例に一致する。その他、杓、匙といった製品が出上しているが、出土点数が少なく本遺跡の傾向はつかめない。

角材、削角材、削板材、削材、丸材、板材、端部切断材といった加工程度の低い製品でも、アカガシ亜属材が多く使用されているが、斧や鎌とは異なり樹種は集中しない。使用目的が明確な製品と比較して削材等には、針葉樹材が含まれていること、アカガシ亜属、サカキ以外の広葉樹も含まれるといった特徴が見られる。これは、これらの製品が、加工途中の多様な製品を内包している可能性があり、そのため使用目的も混在し、樹種も多岐に渡ると考えられる。

針葉樹材は削材等には確認されているが、確認点数の内、大半は未加工木である。針葉樹は、鋸がない時代に木口方向で切断する事が難しいため細かい細工を必要とする製品には利用し難いと考えられる。本遺跡でも時代が異なる掘状遺構（鎌倉～室町）では針葉樹が製品に多く確認されている（神戸市教育委員会1993）。広葉樹材も多種確認されているにもかかわらず、製品として確認できる樹種は少なく、利用樹種自体が比較的限られている事が分かる。

全体の樹種構成は、暖帯の針広混交林であるが、未加工木を除いた樹種は利用・加工技術の問題から限られており、そのために樹種、材質の認識が顕著に現れた結果となった。

### 引用文献

- 山田昌久.1993. 日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成—用材から見た人間・植物関係史、植生史研究、特別一号 :242pp.
- 神戸市教育委員会・(財)神戸市スポーツ教育公社.1993. 神戸市兵庫区大間遺跡発掘調査報告書.216-218pp.

表1 大開遺跡第7次調査出土木製品 樹種別一覧表

製品名	樹種		モミ属	アカマツ	クロマツ	ツガ属	コウヤマキ	ヒノキ	イヌガヤ	針葉樹	シイ属	コナラ属クヌギ節	アガシ属クヌギ節	ケヤキ	ヤマグワ	クスノキ	ヤブツバキ	サカキ	バラ属	シャンボンボ	ケンボナシ属	散孔材	根	樹皮	総計			
斧柄	横斧																	1									1	
	縱斧																2										2	
	未製品																			2								2
平鉗	組合せ															1											1	
	未製品																2										2	
鉤	未製品															1											1	
鍛	鍛or鋤															1											1	
	鋤															1											1	
柄?																	1										1	
匙?	未製品																		1								1	
杓	未製品																		1								1	
四つ手		1																										1
舟形突起																	1										1	
角材															1												1	
割角材															1			1									2	
削板材																												1
削材		1	1		1	1	1	1	3	1	4						1	3								1	19	
丸材									4	1	1	2								1								9
板材									1	1	1	2															5	
端部切断材												2						1									3	
用途不明												1															1	
未加工木	1	3	1	1	3	3	11		12	1	5		1	3			2	1	3		1	2	2			56		
総計	1	3	3	2	3	5	19	1	18	3	25	1	1	5	4	7	1	3	1	1	2	5				114		

表2 大間遺跡第7次調査 出土木材樹種同定結果一覧（1）

R番号	樹種	遺物名	登録番号	出土地区	層位	年月日	
R-116	アカガシ亜属	瓶斧柄	W 5485	S D 301 第2トレーナ内		970226	
R-123	アカガシ亜属	平歛未製品	W 5486	S D 301	20層	970227	
R-124	アカガシ亜属	割材	W 5487	S D 301	20層	970227	
R-125	イヌガヤ	角材	W 5488	S D 301	20層	970226	
R-139-1	クスノキ	割材	W 5489	S D 301 C D区	20層	970227	
R-145-1	アカガシ亜属	用途不明	W 5490	S D 301 第2トレーナ内	黒灰色 下層	970227	
R-145-2	アカガシ亜属	加工丸材	W 5491	S D 301 第2トレーナ内	黒灰色 下層	970227	
R-145-3	サカキ	底未製品?	W 5492	S D 301 第2トレーナ内	黒灰色 下層	970227	
R-255	イヌガヤ	板材	W 5493	S D 301 13 ab 区	23層	970306	
R-253	アカガシ亜属	割材	W 5494	S D 301 15 ab 区	23層	970306	
R-254	アカガシ亜属	板材	W 5495	S D 301 14 ab 区	23層	970306	
R-256	アカガシ亜属	板材	W 5496	S D 301 13 ab 区	23層	970306	
R-259	コナラ属クスギ節	割材	W 5498	S D 301 14 ab 区	23層	970306	
R-399-1	イヌガヤ	割材	W 5497	S D 301 15 ab 区	24層	970311	
R-344	サカキ	斧柄未製品	W 5499	S D 301 13 ab 区	24層	970312	
R-154-1	シイ属	割材	W 5500	S D 301 14 ab 区	24層	970312	
R-354-2	シイ属	割材	W 5501	S D 301 14 ab 区	24層	970312	
R-361-1	ツガ属	割材	W 5502	S D 301 13 ab 区	25層	970313	
R-383-1	コナラ属クスギ節	丸材	W 5503	S D 301 14 ab 区	25層	970313	
R-383-2	イヌガヤ	丸材	W 5504	S D 301 14 ab 区	25層	970313	
R-423-1	クロマツ	割材	W 5505	S D 301 11 ab 区	27層	970317	
R-423-2	イヌガヤ	丸材	W 5506	S D 301 11 ab 区	27層	970317	
R-424	針葉樹	割材	W 5507	S D 301 12 ab 区	26層	970317	
R-426	アカガシ亜属	丸材	W 5508	S D 301 12 ab 区	27層	970317	
R-445	サカキ	斧柄未製品	W 5509	S D 301 第2トレーナ内	27層	970318	
R-446-1	クスノキ	杓未製品	W 5510	S D 301 第2トレーナ内	27層	970318	
R-446-2	ヒノキ	板材	W 5531	S D 301 第2トレーナ内	27層	970318	
R-451	アカガシ亜属	鈎?	W 5512	S D 301 第2トレーナ内	27層	970318	
R-452	樹皮	鈎 or 跡	W 5513	S D 301 第2トレーナ内	27層	970318	
R-455	アカガシ亜属	端部切断材	W 5514	S D 301 15 ab 区	27層	970318	
R-458-1	イヌガヤ	割角材	W 5515	S D 301 15 ab 区	27層	970318	
R-458-2	ケヤキ	削角材	W 5516	S D 301 15 ab 区	27層	970318	
R-460	アカガシ亜属	平歛未製品	W 5511	S D 301 第2トレーナ内	27層	970318	
R-461	シイ属	柄?	W 5517	S D 301 16 ab 区	27層	970318	
R-462	ヤブツバキ	端部切断材	W 5518	S D 301 14 ab 区	27層	970318	
R-466	シイ属	丸材	W 5519	S D 301 14 区	28層	970318	
R-468	ヤブツバキ	割材	W 5520	S D 301 15 ~ 16 区	27層	970318	
R-470	ヤブツバキ	割材	W 5521	S D 301 15 ~ 16 区	27層	970318	
R-471	ヤブツバキ	割材	W 5522	S D 301 15 ~ 16 区	27層	970318	
R-472	アカガシ亜属	端部切断材	W 5523	S D 301 15 ~ 16 区	27層	970318	
R-473	サカキ	横斧柄	W 5524	S D 301 16 区	27層	970318	
R-475	アカガシ亜属	底斧柄	W 5525	S D 301 16 区	27層	970318	
R-479	クロマツ	四つ手	W 5542	S D 301 16 区	27層	970319	
R-482	イヌガヤ	丸材	W 5526	S D 301 15 a 区	27層	970319	
R-488	アカガシ亜属	鈎 or 破	W 5527	S D 301 15 a 区	27層	970319	
R-492	樹皮	割材	W 5528	15 b 区	27層	970319	
R-502	シイ属	割材	W 5532	S D 301 15 ab 区	29層	970321	
R-508	サカキ	丸材	W 5530	S D 301 15 ab 区	27層	970321	
R-519	アカガシ亜属	歛未製品	W 5529	S D 301 14 ab 区	27層	970321	
R-527	シイ属	板材	W 5533	S D 301 13 ab 区	27層	970321	
R-547-1	アカガシ亜属	割材	W 5534	S D 301	下層	970326	
R-547-2	イヌガヤ	丸材	W 5535	S D 301	下層	970326	
R-549-1	アカガシ亜属	舟形突起	W 5536	S D 301	抜張区	最下層	970326
R-549-2	アカガシ亜属	割材	W 5537	S D 301	抜張区	最下層	970326
R-549-3	ヒノキ	割材	W 5538	S D 301	抜張区	最下層	970326
R-A	アカガシ亜属	組合せ平板	W 5539	S D 301	抜張区	9703	
R-B	樹皮(針葉樹)	削板材	W 5540	S D 301	抜張区	9703	
R-C	ケンボシナ属	割材	W 5541	S D 301	抜張区	9703	
R-139-2	イヌガヤ	未加工木		S D 301 C D区	20層	970227	

表2 大開遺跡第7次調査 出土木材樹種同定結果一覧（2）

R番号	樹種	遺物名	登録番号	出土地区	層位	年月日
R-139-3	イヌガヤ	未加工木	SD 301	C D区	20層	970227
R-139-4	クロマツ	未加工木	SD 301	C D区	20層	970227
R-145-4	散孔材	未加工木	SD 301	第2トレーンチ内	黒灰色 下層	970227
R-145-5	ヒノキ	未加工木	SD 301	第2トレーンチ内	黒灰色 下層	970227
R-145-6	シイ属	未加工木	SD 301	第2トレーンチ内	黒灰色 下層	970227
R-145-7	イヌガヤ	未加工木	SD 301	第2トレーンチ内	黒灰色 下層	970227
R-145-8	イヌガヤ	未加工木	SD 301	第2トレーンチ内	黒灰色 下層	970227
R-208	イヌガヤ	未加工木	SD 301	14 ab 区	22層	970305
R-258	ツカ属	未加工木	SD 301	12 ab 区	23層	970306
R-277	イヌガヤ	未加工木	SD 301	15 ab 区	26下層	970307
R-288-1	コウヤマキ	未加工木	SD 301	13 ab 区	23層	970307
R-288-2	シイ属?	未加工木	SD 301	13 ab 区	23層	970307
R-289-1	シイ属?	未加工木	SD 301	15 ab 区	23層	970307
R-289-2	シイ属	未加工木	SD 301	13 ab 区	23層	970307
R-336-1	ヤマグワ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-2	クリ or シイ属 横	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-3	コナラ属クヌギ節 横	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-4	シャシャンボ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-5	アカガシ垂属	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-6	コウヤマキ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-7	シイ属	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-8	ヒノキ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-9	シャシャンボ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-10	シャシャンボ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-11	サカキ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-12	サカキ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-13	樹皮	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-336-14	樹皮	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層上部	970311
R-339-2	アカマツ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層	970311
R-339-3	イヌガヤ	未加工木	SD 301	15 ab 区	24層	970311
R-342	クスノキ	未加工木	SD 301	14 ab 区	24層	970312
R-352-1	イヌガヤ	未加工木	SD 301	13 ab 区	24層	970312
R-352-2	シイ属?	未加工木	SD 301	13 ab 区	24層	970312
R-352-3	アカマツ	未加工木	SD 301	13 ab 区	24層	970312
R-369-1	イヌガヤ	未加工木	SD 301	13 ab 区	25層	970313
R-369-2	イヌガヤ	未加工木	SD 301	13 ab 区	25層	970313
R-391-1	クスノキ	未加工木	SD 301	11 ab 区	26層	970314
R-391-2	クスノキ	未加工木	SD 301	11 ab 区	26層	970314
R-406	コウヤマキ	未加工木	SD 301	15 ab 区	25層	970314
R-413-1	アカガシ垂属	未加工木	SD 301	14 ab 区	27層	970317
R-413-2	コナラ属クヌギ節	未加工木	SD 301	14 ab 区	27層	970317
R-413-3	シイ属	未加工木	SD 301	14 ab 区	27層	970317
R-453	アカガシ垂属	未加工木	SD 301	15 ab 区	27層	970318
R-458-3	アカマツ	未加工木	SD 301	15 ab 区	27層	970318
R-458-4	ヒノキ	未加工木	SD 301	15 ab 区	27層	970318
R-483	イヌガヤ	未加工木	SD 301	15 a 区	27層	970319
R-526-1	シイ属	未加工木	SD 301	16 a 区	27層	970321
R-526-2	シイ属	未加工木	SD 301	16 a 区	27層	970321
R-526-3	シイ属	未加工木	SD 301	16 a 区	27層	970321
R-526-4	モミ属	未加工木	SD 301	板張区	最下層	970326
R-549-5	バラ属	未加工木	SD 301	板張区	最下層	970326
R-549-6	アカガシ垂属	未加工木	SD 301	板張区	最下層	970326
R-D	シイ属?	未加工木	SD 301	15 ab 区	29層	970321
R-E	シイ属?	未加工木	SD 301	15 ab 区	29層	970321
R-F	アカガシ垂属	未加工木	SD 301	15 ab 区	29層	970321

写真図版1

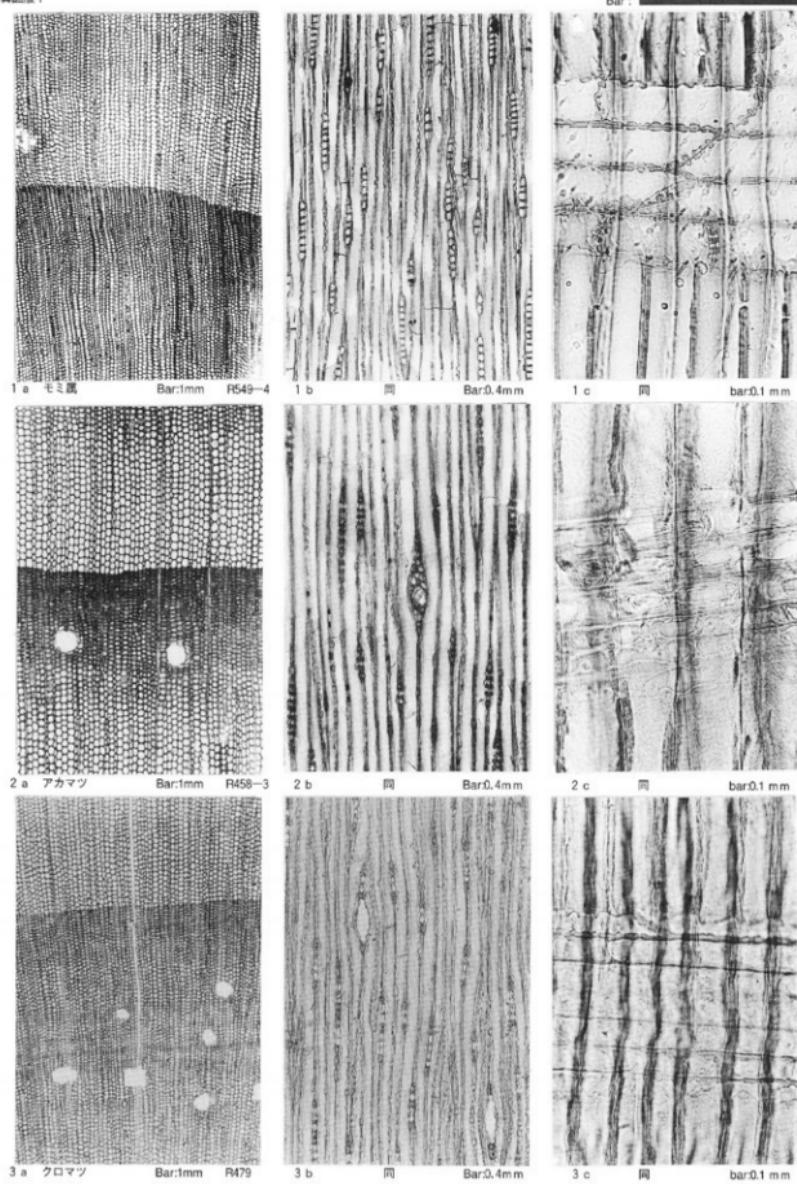
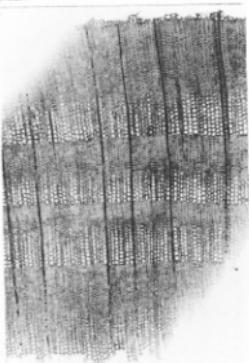
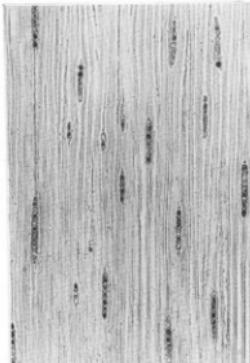


fig. 225 大間遺跡（第7次）出土木材組織顕微鏡写真

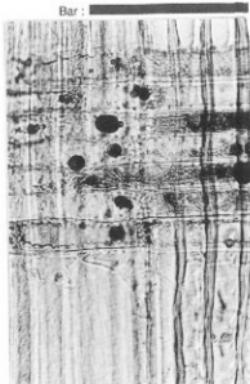
写真図版2



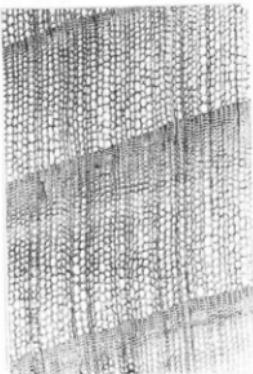
4 a ツガ属 Bar:1mm R381-1



4 b 同 Bar:0.4mm



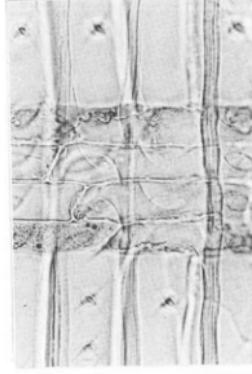
4 c 同 bar:0.1 mm



5 a コウヤマキ Bar:1mm R406



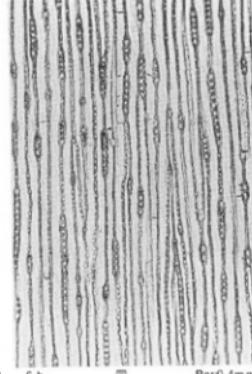
5 b 同 Bar:0.4mm



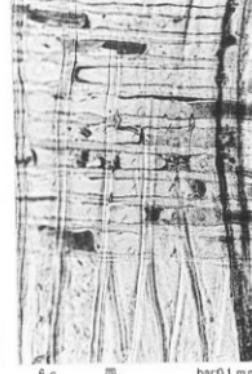
5 c 同 bar:0.1 mm



6 a ヒノキ Bar:1mm R336-8



6 b 同 Bar:0.4mm



6 c 同 bar:0.1 mm

fig. 226 大間遺跡（第7次）出土木材組織顕微鏡写真

写真図版 3

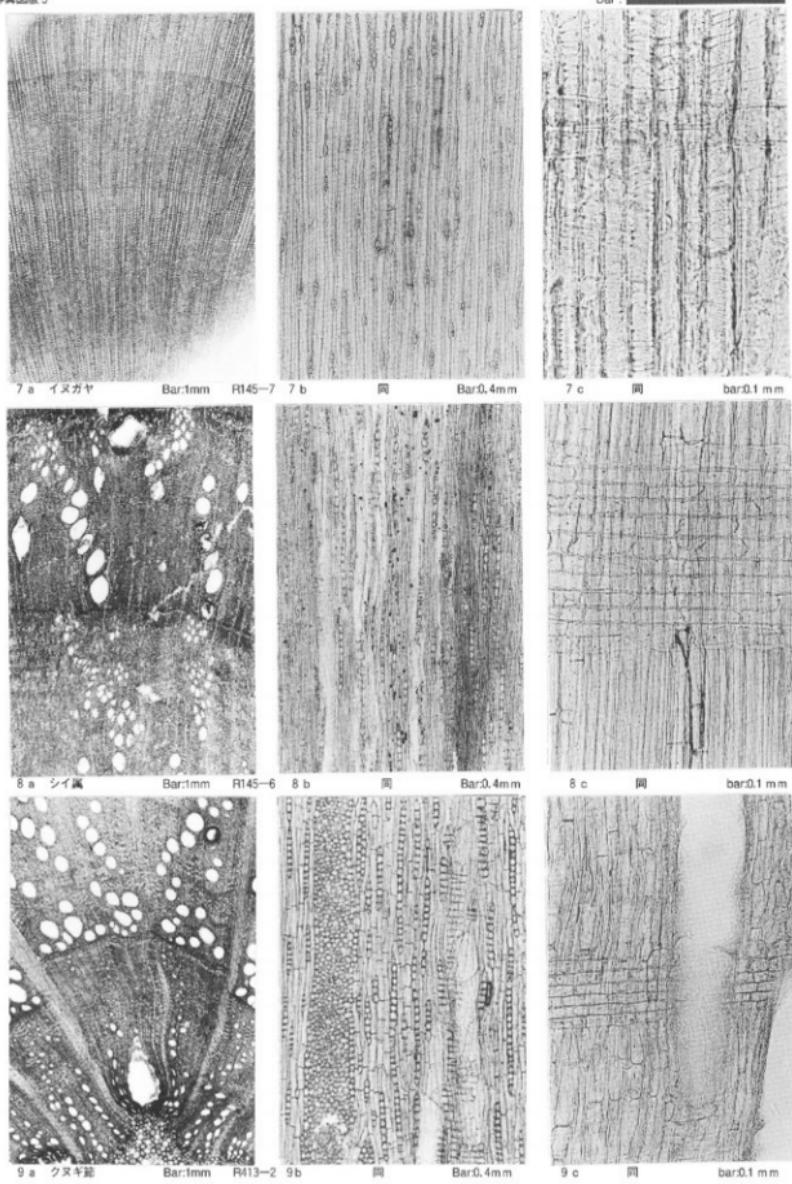


fig. 227 大間遺跡（第7次）出土木材組織顕微鏡写真

写真図版4

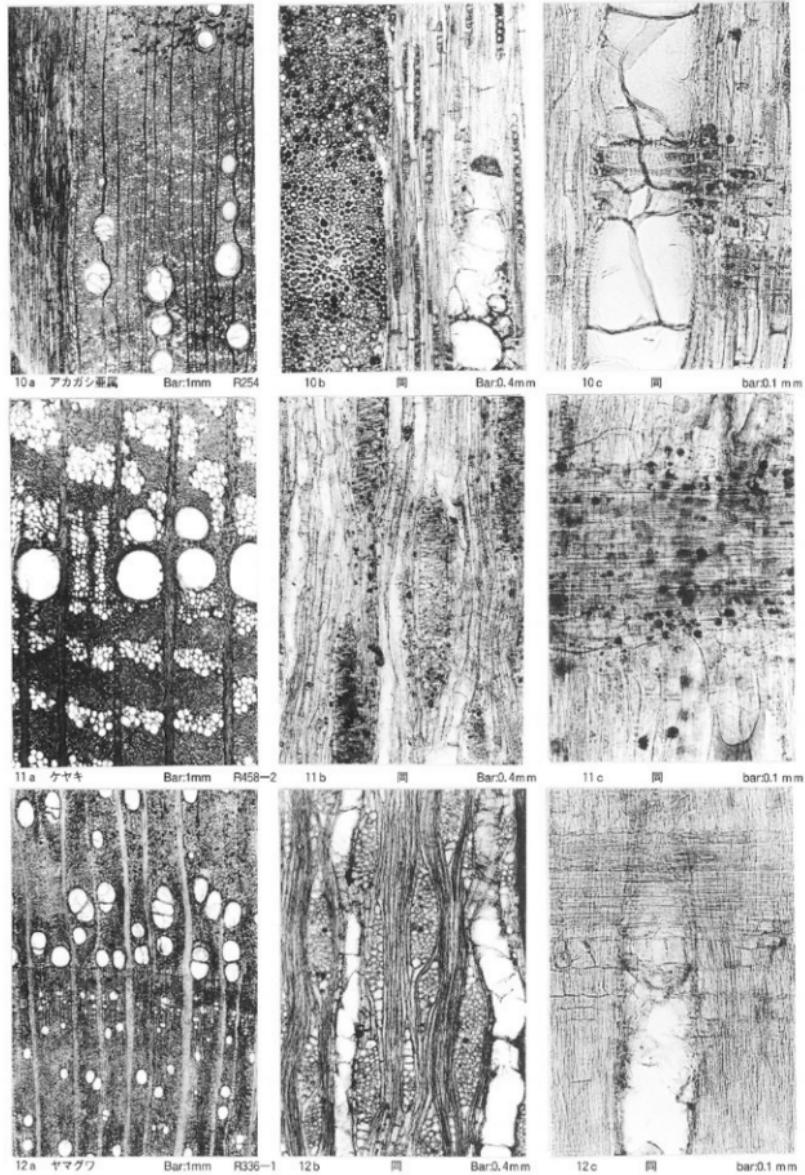


Fig. 228 大間遺跡（第7次）出土木材細胞壁微鏡写真

写真図版5

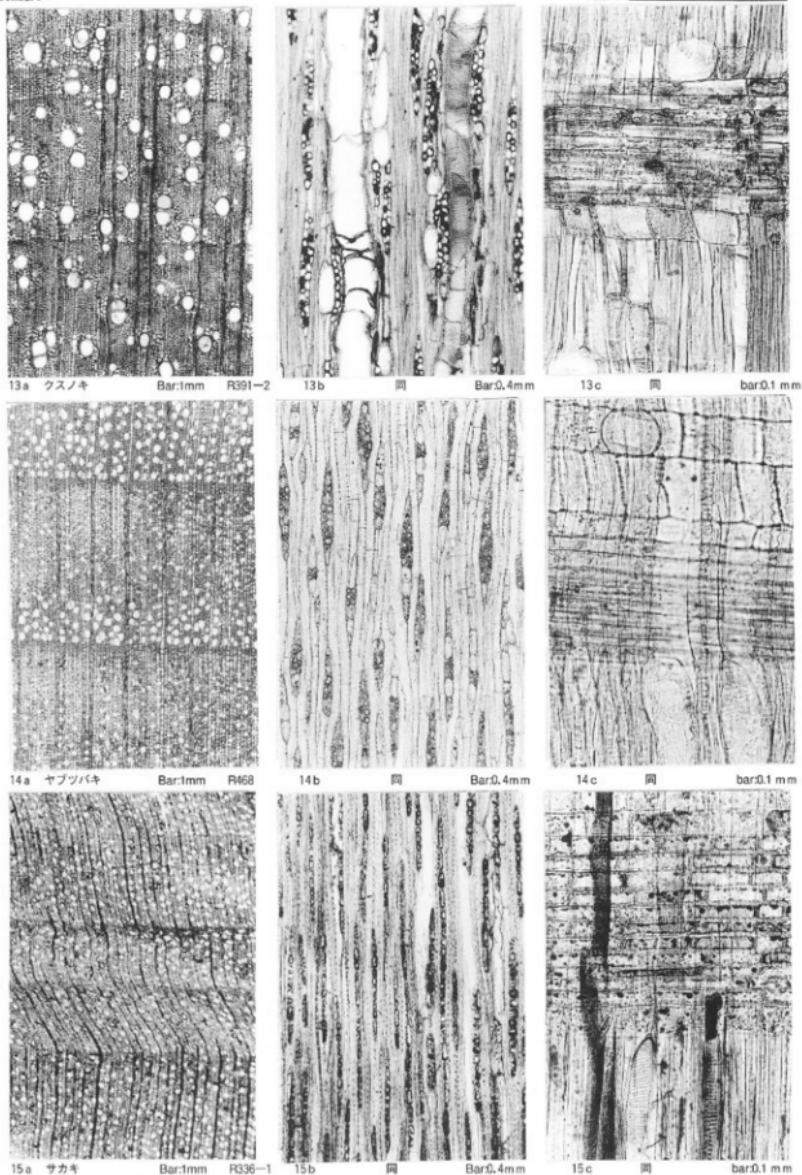
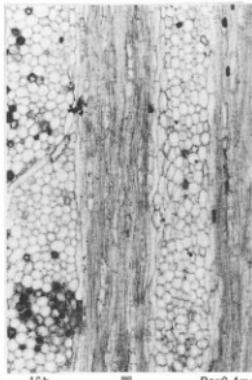


fig. 229 大岡遺跡（第7次）出土木材組織微鏡写真

写真図版6



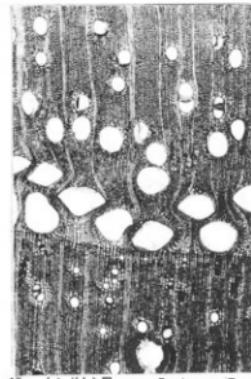
16a バラ属 Bar:1mm F549-5



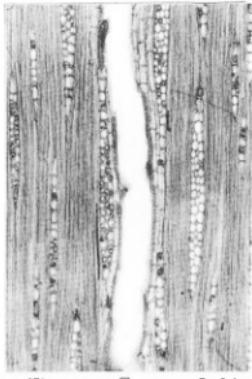
16b 同 Bar:0.4mm



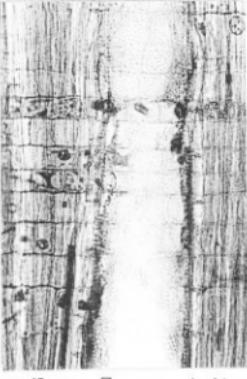
16c 同 bar:0.1 mm



17a ケンボナシ属 Bar:1mm R-C



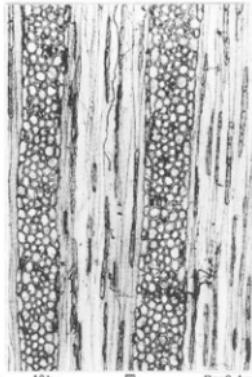
17b 同 Bar:0.4mm



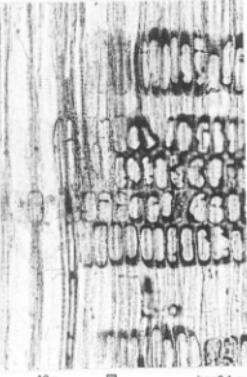
17c 同 bar:0.1 mm



18a シャシャンボ Bar:1mm F336-9



18b 同 Bar:0.4mm



18c 同 bar:0.1 mm

fig. 230 大岡遺跡（第7次）出土木材組織顕微鏡写真

## かみさわ 33. 上沢遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

上沢遺跡でのこれまでの調査は、平成元年（1989）に都市計画道路房王寺線の拡幅工事に伴い神戸市教育委員会が行った調査が第1次調査である。その時の調査では縄文時代晚期から弥生時代前期の自然流路、弥生時代後期の集落跡等が見つかっている。その後、平成7年に第2次調査で、弥生時代の水田面が見つかっている。

今回の調査は第3次調査として行うもので、山手幹線の拡幅に伴う調査である。調査可能範囲から順次着手したため、便宜上、東方から1区・2区・3区とした。



fig. 231  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

#### 第1調査区

第1調査区は、調査範囲に共同住宅のライフラインが埋設されている等、多くの搅乱を受けており、遺構は存在せず、包含層の遺物も希薄なものであった。第1調査区の範囲は上沢遺跡の末端に当たると思われる。



fig. 232  
第2調査区 全景  
(西上空から)

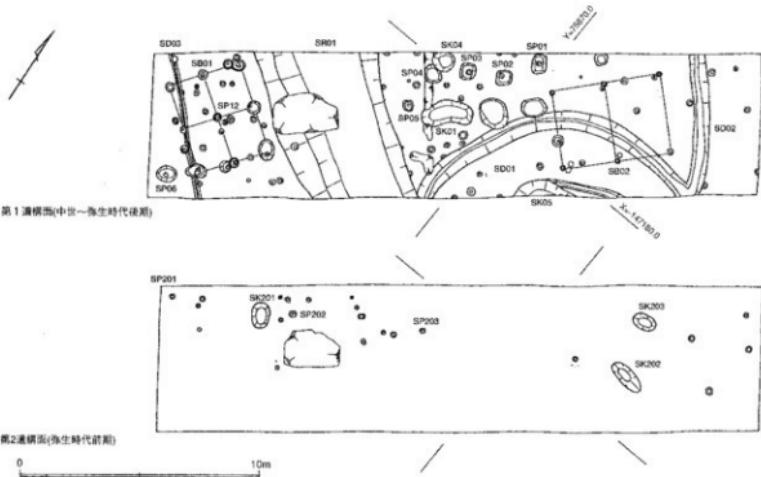


fig. 233 第2調査区 潜構平面図

## 第2調査区

第2調査区は第1調査区から約80m西に位置する調査区で、表土下数センチで茶褐色砂

### 第1造構面

質シルト層の良好な包含層が残っていた。

**S R01** 遺物包含層上面から切り込み、調査区のほぼ中央を南北方向に流れる、緩やかに落ち込む流路である。埋土の上層には拳大から人頭大の礫が流路の方向に沿って埋没していた。

流路の埋土は包含層に極めて類似したもので、シルト質細砂層の堆積で中間層を埋めていた。下層は基盤層（地山面）を僅かに切り込んで砂礫層が堆積していた。最下層の黒色シルト層からは古墳時代の須恵器が出土している。中間層からは8世紀から12世紀の時期差を持った遺物が出土している。中でも10世紀代のものが多い。この中間層から8世紀代の土馬の首から上と脚が出土している。上層からは12世紀代の須恵器が出土している。

**S B01** S B01は2間×2間以上の掘立柱建物で、柱穴には礫を含むものが多い。出土遺物から10世紀頃のものと思われる。

**S B02** S B02は2間×1間以上の掘立柱建物で、柱穴の規模は径約15cmである。南北方向の柱間が3m以上もある。出土遺物から12世紀頃のものと思われる。

**S D01** 円弧状に巡る溝で、その断面形は逆台形状である。調査区外に延びるため、全体像は明確には出来ない。溝の一部で、弥生時代後期の土器がまとまって投棄された状態で出土している。単なる廃棄とは思われないが、この土器の投棄が何に起因するかは不明である。出土土器は完形品が多く、壺、甕、鉢、高杯と器種は多様である。特に壺の出土量が多い。S D02はS D01に結合する溝で、同時に存在し、機能していた可能性がある。

**第2造構面** 第2造構面は第1造構面の基盤層である弥生時代前期の遺物包含層を掘削後に検出した造構面である。主な造構は土坑やピットで、S P201からは、多くの弥生時代前期の遺物が出土している。

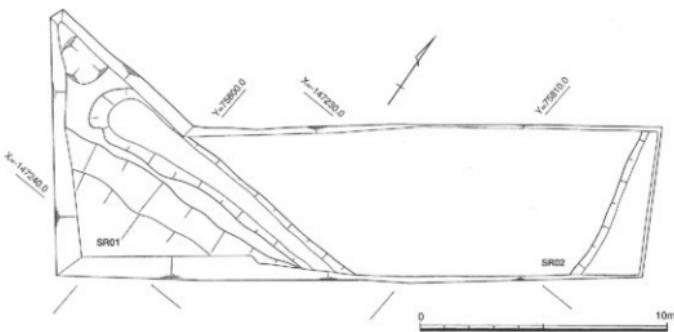


fig. 234  
第3調査区  
第1遺構面平面図

### 第3調査区

第3調査区は、山手幹線と都市計画道路房王寺線の交差点の北西から東に長さ約25m、幅が約6m（交差点付近で最大約11m）の調査区である。現地表面が標高10mから10.5mほどで、南に傾斜すると同時に、調査区のほぼ中央を境にして東西にも傾斜する。

### 基本層序

調査区南壁では、盛土・近世の耕土が存在し、その直下が第1遺構面である。その下には古代から弥生時代後期にかけての土器が多く含む包含層があり、それを除去した段階が第3遺構面である。弥生時代後期の基盤層の下層には弥生時代前期の土器をわずかに含む灰白色のシルト・極細砂層が堆積し、さらに下層には淡黒色のシルト層が堆積する。この淡黒色シルトの上面が第3遺構面で、淡黒色シルト層の下面が第4遺構面である。

### 第1遺構面

攪乱土・整地上や近世の耕作土を掘削したところ、調査区の両端において自然流路2条 S R01 が見つかった。S R01は調査区の西端に位置し、ほぼ西から東にむけて流れれる。弥生土器、須恵器、土師器など、多くの遺物を含み、中世以降に埋没する。

### S R02

調査区東端にかかる S R02 は北から南に向かって流れ、堆積土中には弥生土器、須恵器土師器、陶器類を大量に含む。瓦器の存在から中世以降に埋没した自然河道と思われる。河道の正確な規模は明らかにし得ないが、断面観察から時期は大きく3段階の流路に分けて考えられ、新しくなるにつれて流れが東側に移動するのと同時に規模が大きくなる。

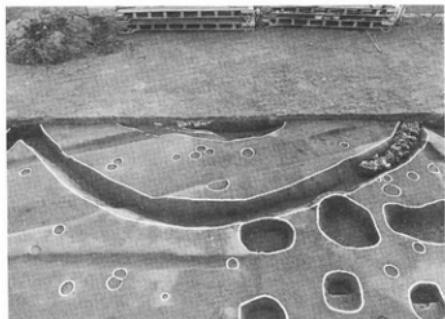


fig. 235 第2調査区 第1遺構面 S D01



fig. 236 S D01 遺物出土状況

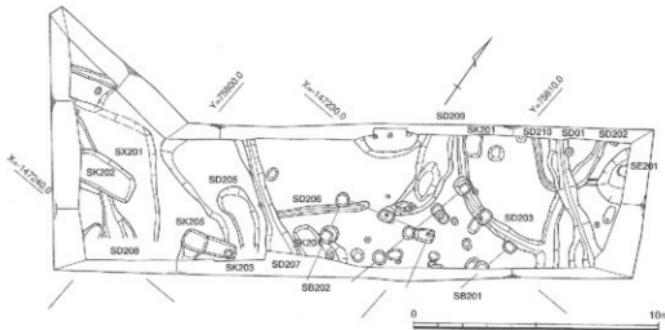


fig. 237  
第3調査区  
第2遺構面平面図

**第2遺構面** 遺物を大量に含む古代から弥生後期の包含層を除去後に、弥生時代後期の基盤層である黄褐色シルト層の上面において多くの遺構を検出した。奈良時代から平安時代、古墳時代弥生時代後期の遺構が見られるが、奈良時代や古墳時代の遺構は本来それぞれの包含層中より掘り込まれていたと思われる。

**S E 201** 調査区の東端に位置し、半分が調査区外である。掘形の平面形は約2.3mの円形ないしは隅丸方形であり、その中に円形の井戸枠を取める。この井戸は第1遺構面のS R 02によって上部を削平されていると思われるが、S R 02の底からの深さは2.1mを測る。掘形の断面形状は逆三角形状である。井戸枠は自然木を半裁した後に内面をくり抜いた厚さ5~7cmの板材を3枚合わせて用いており、現存高が1.6m、内径は上部で約50cm、下部で約30cmを測る。板材の表面には工具による加工痕が明瞭に認められた。なお、井戸底に曲物は存在しなかつた。

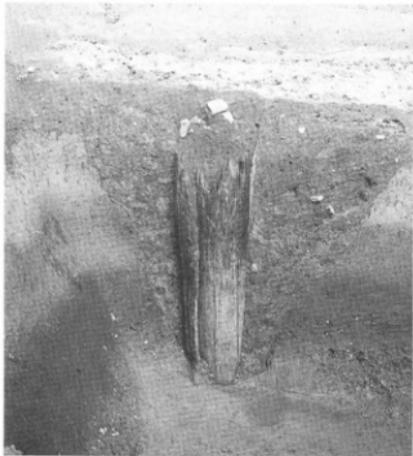


fig. 238 第3調査区第2遺構面 井戸 SE201



fig. 239 同左の断面

**出土遺物** 出土遺物は、須恵器、土師器、瓦、木製品がある。主に井戸枠内の第4層から第7層にかけて見られたが、掘形内でもわずかに出土している。図示 (fig. 240) したものはいずれも第7層から出土したもので、井戸の使用時期を表すものである。

**須恵器** 壺(2)とその蓋(1)がある。2は小片であるが1は完形に近い。

**土師器** 壺蓋(3)、皿(4~6)、鉢(7)、壺(8~11)がある。3はつまみの天井部に暗文を施す。8・9は外面を強くなれて仕上げる。10は外面を主にハケで仕上げ、内面はなでて仕上げるが、ナデの下には須恵器の技法である同心円文の當て具痕が認められる。11は長胴の壺である。なお、図示はしていないが、瓦は碎片が第6・7層にも見られたが、井戸が埋没する最終段階(第4層)に投棄されたもので、拳大の縁とともにかなり大きな破片が見られた。いずれも模骨痕は無く、平安時代以降の一枚造りの瓦である。木製品は直径6cm程の笠状をしたものがあり、上面から下方にむけて二箇所に穿孔が見られ、下面には段を作っている。何かの蓋と考えられる。以上の遺物とその出土状況から見て、井戸の使用時期は奈良時代から平安時代にかけてと見られる。

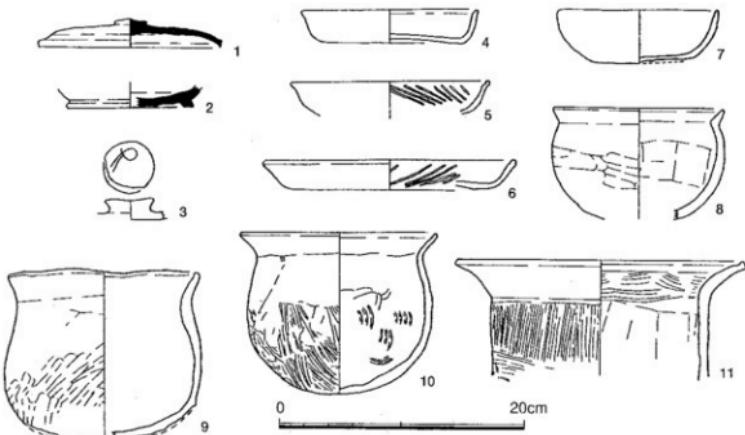


fig. 240 SE01 遺物実測図 (1・2: 須恵器 3~11: 土師器)

**掘立柱建物** 2棟検出された掘立柱建物の時期を示す出土遺物はいずれも少なく、S B201からは奈良時代から平安時代の須恵器片、土師器片が、S B202からは古墳時代後期、奈良時代から平安時代の須恵器が出土している。規模や構造の概要是、表1のとおりである。

遺構名	桁行×梁間・構造	柱穴間芯心距離	柱穴掘形	建物方位
S B201	3間以上×2間・側柱	1.5m~1.6m	一辺50cm~60cmの隅丸方形	N-15°-E
S B201	2間以上×2間・側柱	1.16m~1.8m	一辺50cm~70cmの長方形	N-10°-E

表1 3区第2遺構面検出 掘立柱建物の概要

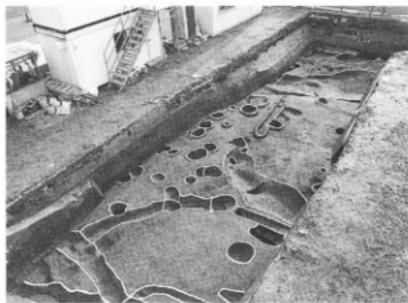


fig. 241 第3調査区 第2遺構面全景

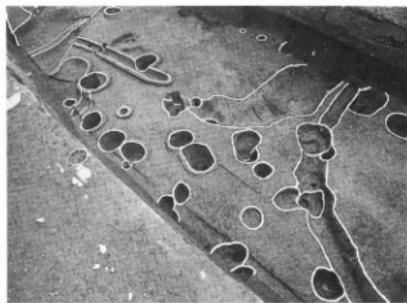
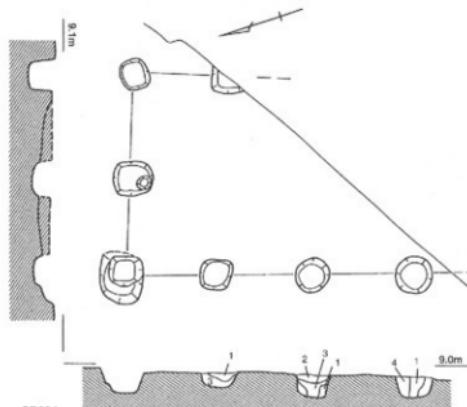


fig. 242 同左の掘立柱建物



1.暗褐色シルト  
2.褐灰色シルト  
3.暗褐色シルト  
4.稍灰褐色シルト(黄灰色シルト混じり)

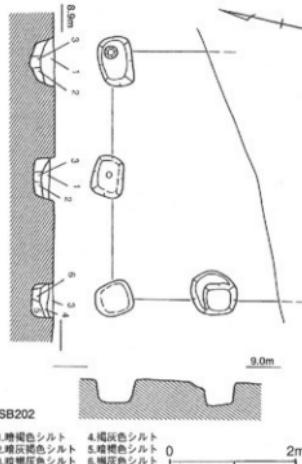


fig. 243 掘立柱建物平面図・断面図

**土 坑** 検出された土坑は、5基でその時期は、弥生時代後期後半・終末期、古墳時代後期、奈良時代末から平安時代のものがある。土坑の概要は、表2のとおりである。

遺構名	規 模	平面形	出土状況	時 期
S K201	長軸 1m、短軸80cm、深さ30cm	長方形	須恵器片	古墳時代
S K202	長軸1.5m以上、短軸1.3m、深さ35cm	長方形	須恵器、土器がまとまって出土。木片	奈良時代～平安時代
S K203	長軸2.2m、短軸80cm、深さ40cm	長方形	須恵器窓片、土師器	5世紀後半
S K204	長軸2 m以上、短軸1 m、深さ30cm	長円形	弥生土器	弥生時代後期後半
S K205	長軸 1 m、短軸80cm、深さ35cm	長方形	弥生土器	弥生時代後期末

表2 第3調査区第2遺構面検出 土坑の概要

S X201 調査区西端に位置する。下層の自然流路の影響で出来た落ち込みであろう。弥生時代後期の遺物が出土している。

溝 検出された溝の形状やその性格は様々である。S D205は、北半部にミニチュア壺や台付き椀などの庄内式土器と弥生時代後期末の上器が大量に投棄されていた。S D208は自然流路の埋没過程の溝である。S D210は平面形L字形の溝で、その形状から竪穴住居の周壁溝の可能性も考えられる。上記の溝を含む他の溝の概要は表3のことおりである。

遺構名	規 模	検出状況	時 期
S D201	幅60~70cm、深さ40cm	北西から南東に向かい流れる溝。	弥生時代後期末
S D202	幅40~60cm、深さ20cm	S D201と交差し、S D201に先行する。	弥生時代後期末
S D203	幅50cm、深さ20cm	緩やかに円弧を描き、S D202に合流する。	弥生時代後期末
S D204	幅30cm、深さ10cm	調査区北西隅にあり、東西に流れる溝。	古墳時代後期
S D205	幅3m、深さ25cm	北半部に弥生時代後期末の上器を投棄。	弥生時代後期末
S D206	幅30cm、深さ10cm	細く小さな溝。	弥生時代後期
S D207	幅50cm、深さ20cm	S D205に並行する溝。	弥生時代後期
S D208	幅20~40cm	自然流路の埋没過程の最終段階の溝。	弥生時代後期
S D209	幅1.2m、深さ20cm	西側に屈曲。S D206に接続の可能性がある。	弥生時代後期末
S D210	幅20cm、深さ10cm	平面形L字形。S D201・202に先行する溝。	弥生時代後期

表3 第3調査区第2遺構面検出 溝の概要

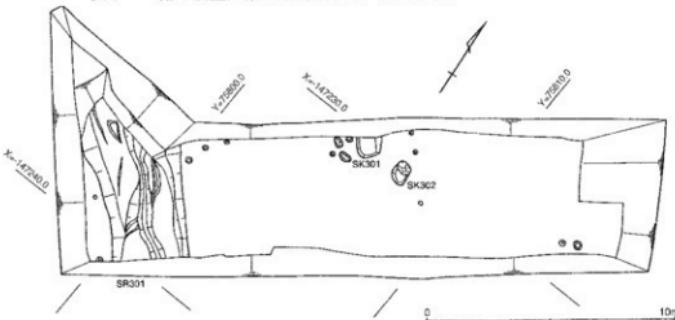


Fig. 244  
第3調査区  
第2遺構面平面図

第3遺構面 弥生時代前期の遺構面である。弥生時代後期の基盤層から下に60~70cmあまりで弥生時代前期の土器を含む遺物包含層が堆積し、その下層の淡黒色シルト層の上面で検出した。

S R301 幅3~4mで深さ80cmの自然流路である。流路は土層の堆積状況から3段階に分けられ、古段階ではシルトと極細砂層が互層に堆積し、中段階では礫を含んだ細砂から極細砂層が堆積し、ほぼ埋没した段階で浅い溝状に砂質シルト層が堆積する。遺物は各層から出土しており、弥生時代前期の土器片を主体とし縄文時代晩期の土器片も含んでいた。

S K301 調査区のはば中央北壁沿いに位置する土坑である。平面形は隅丸方形をなし、一辺が1m、深さは8cmと浅く、皿状の断面をする。検出面で西側の肩部が熱を受けて、若干赤変しており、埋土中には炭化物を含む。淡黒色シルト層の上面で検出したが、断面観察から実際は上層の灰白色シルト層から掘り込まれていた。住居の炉であった可能性がある。

S K 302 S K 301の東1mに位置する。平面形は長円形で、径は70~90cm、深さ12cmで皿状の断面を呈する。S K 301が炉であるとすると、竪穴住居の柱穴であった可能性もある。

ピット いくつかのピットを検出した。そのうち大半は遺物が出土していないが、弥生時代前期の可能性がある。また、S K 301あたりにピットが集中する傾向がある。

第4遺構面 弥生時代前期の遺構検出面である淡褐色シルト層の下層には、黒灰色シルト層などが厚さ80cm程堆積する。黒色シルト層からは磨滅した縄文土器の小片が1点出土した。

S R 401 調査区西半部に位置し、調査区を北から南に流れる自然流路である。調査区南端辺りではS R 301に切られる。幅は1.2~1.7m、深さ50cmを測る。埋土は大きく2層に分かれる。上層が灰色細砂層、下層が灰色粗砂層である。遺物は出土していない。

S K 401 推定で直径1m程の不整円形を呈し、深さは約60cmである。壁面は底に向かってほぼ真っ直ぐ下がるが、やや拡張になるところもある。底面は平坦で、中央部がさらに一段皿状に窪み、その周囲に人頭人の石1個と拳大の石が2個あった。落し穴状遺構、あるいは弥生時代の袋状土坑に類似するが、沖積地であることから貯蔵穴の可能性がある。

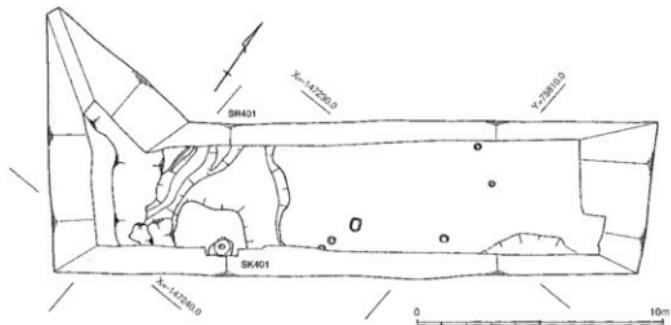


fig. 245 第3調査区 第4遺構面平面図

### 3.まとめ

今回の調査では弥生時代前期・後期、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世と各時代の遺構が見つかり、上沢遺跡が複合大集落であることが判明した。なかでもその存在が不明確であった奈良~平安時代の遺構が多く見つかり、建物も4棟見つかったことは当該期の集落の中心になると思われる。特に奈良時代の、半蔵した丸太をくり抜いた井戸はその構造や丁寧な作り方から、中心的建物の存在が考えられ、一般的な集落とは隔絶したものと示唆するものである。

弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての遺構の密度は高く、その時代の遺物も多く出土しており、今後の調査では当該期の住居等、集落の中心を示す遺構の発見が予想され、今後の調査の進展によって、集落の性格がさらに明確になるものと思われる。

さらに弥生時代前期の遺構を確認したことは、これまで自然流路しか確認されていなかった同時期の集落の位置が明確になり、集落の構造を考える上で貴重な発見であった。このように上沢遺跡の性格は、これまで考えられていた以上に貴重な遺跡であることが判明し、遺跡の残存状況も極めて良好である。

## かみさわ 34. 上沢遺跡 第4次調査

### 1. はじめに

今回の調査は、震災後の再建による店舗付き個人住宅の建設に伴うもので、計画建物の範囲について発掘調査を実施した。調査地は、都市計画道路山手幹線拡幅工事に伴う調査で、弥生時代前期から中世に至る遺構が検出された第3次調査地の北側にあたる。



fig. 246  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、淡灰色砂質シルト層、灰褐色砂質シルト層の下層に遺物包含層である茶褐色砂質シルト層が堆積している。検出された遺構は、掘立柱建物1棟、土坑7基、ピット50基であった。

S B01

2間以上×1間以上の掘立柱建物で、柱穴の規模は直径約60~70cm、深さ50~60cmである。柱間は東西方向が2m前後、南北方向が3mである。出土遺物から8世紀頃の建物であると思われる。柱穴の中で、S P5・7・13・14・26からは人頭大の礫が出土している。

S P22

直径40cm、深さ33cmのピットであるが、埋上下層より銅製の帶金具の巡方が1点出土し(銅製帶金具の出土)ている。帶金具は一辺約2cmの正方形で奈良時代のものと思われる。

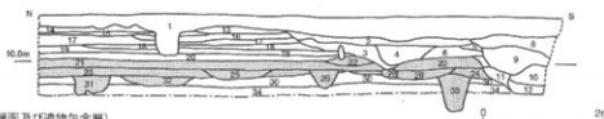


fig. 247

調査区断面図（トーンは凍積面及び遺物包含層）

- |                 |                         |                     |                     |
|-----------------|-------------------------|---------------------|---------------------|
| 1. 掘立・盛土        | 10. 淡灰色シルト              | 19. 淡灰色砂質シルト        | 28. ピット             |
| 2. 淡灰色砂質シルト     | 11. 淡黒色シルト質粘土           | 20. 灰褐色砂質シルト        | 28. SK03            |
| 3. 淡灰色砂質シルト～極細砂 | 12. 灰褐色シルト              | 21. 茶褐色シルト質粘土       | 30. 雜灰褐色砂質シルト～粘土・小礫 |
| 4. 淡灰色砂質シルト     | 13. 灰褐色砂質シルト(旧耕作土)      | 22. 淡茶褐色シルト質粘土      | 31. SP11            |
| 5. 灰褐色砂質シルト     | 14. 灰褐色砂質シルト(旧耕作土)      | 23. 淡茶褐色シルト質粘土      | 32. SK02            |
| 6. 淡灰色砂質シルト～極細砂 | 15. 淡灰色砂質シルト(旧耕作土)      | 24. 灰褐色砂質シルト(遺物包含層) | 33. SP15            |
| 7. 明灰色砂質シルト     | 16. 黄褐色砂質シルト(旧床土)       | 25. SK05            | 34. 淡灰褐色砂質シルト～極細砂   |
| 8. 淡灰褐色砂質細砂     | 17. 反対側灰色砂質シルト～極細砂(旧床土) | 26. SP16            |                     |
| 9. 灰褐色シルト質粘土    | 18. 明黄色砂質シルト～極細砂(旧床土)   | 27. SK06            |                     |

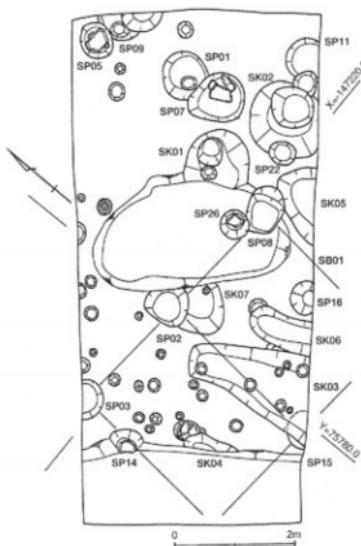


fig. 248 遺構平面図



fig. 249 調査区全景

S K01 撫乱によりその約半分を削平されているが、直径1.1m、深さ40cmの円形の土坑である。土坑底に直径26cmのピットを穿っている。古墳時代と思われる。

S K07 撫乱とピットによってその一部を削平されているが、直径1m、深さ9.5cmの円形の土坑で古墳時代のものであろう。

S K02 ピットによってその一部を削平されているが、直径1.3m、深さ55cmの円形の土坑で、土坑埋土より多くの弥生時代前期の土器が出上した。弥生時代前期の遺構として判明しているものはこのS K02とSP31のみである。

その他の土坑については、奈良時代～平安時代のものであると思われる。

3.まとめ 今回の調査で特筆すべきは銅製帯金具の出土であろう。遺物の性格から、奈良時代の役所あるいは、それに準ずる施設の存在が明らかとなった。今後、同時期の建物配置や遺物の詳細な検討が遺跡の性格を考える上で重要な作業となるであろう。

さらに弥生時代前期の遺構が見つかったことは、同時期の集落の位置が見つかったという点で重要な発見であった。

周辺の調査は、個人住宅建設に伴う小規模なものが多いが、このような調査成果の積み重ねが上沢遺跡の全体像を考える上で重要な作業といえる。

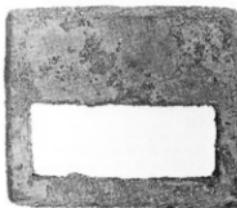


fig. 250 SP22 出土の銅製帯金具

## かみさわ 35. 上沢遺跡 第5次調査

### 1. はじめに

上沢遺跡は、都市計画道路房王寺線や山手幹線拡幅工事に伴う発掘調査の成果で、弥生時代前期から中世の集落跡であることが明らかになっている。平成8年度にいたり区画整理地内に震災後の個人住宅建設に伴う発掘調査が行われている。第4次調査では、弥生時代前期の良好な資料が出土した他、奈良時代のものと考えられる銅製帶金具が出土しており、小規模な調査ではあるが当遺跡の性格を知り得る成果をあげている。

今回の調査も個人住宅建設によるもので、計画建物の基礎工事影響範囲及び影響深度であるT.P.9.8mまでの調査をおこなった。



fig. 251  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

今回の調査地は、六甲山南麓の現標高約12mの扇状地に立地している。1次調査などの周辺部の調査等から弥生時代前期及び中世の遺構・遺物の検出が予測された。

#### 第1遺構面

第1遺構面は、灰褐色砂混シルト層の下面で検出された遺構面である。遺構としては、ピット22ヶ所・溝2条・土坑3基を検出した。時期としては、平安時代から鎌倉時代にかけてのものが同一面で検出されている。

#### S K01

調査区西隅に位置する幅77cm、深さ22cmを測る土坑である。擾乱により、南半が切られおり、遺構の形状は不明である。出土遺物としては、灰釉陶器などが出土しているが、細片のため正確な時期等は明らかにしがたいが、およそ平安時代のものと思われる。

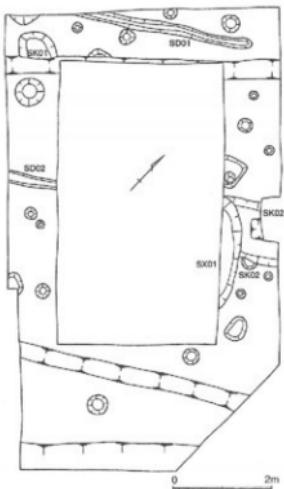


fig. 252 第1発掘面 平面図



fig. 253 第1発掘面 全景

**S K02** 調査区中央部東に位置する幅130cm、深さ12cmを測る土坑である。殆どが調査区外となるため、遺構の形状は不明である。なお、S X01との切り合い関係により、S X01より古い出土遺物としては、灰釉陶器などが出土しているものの、細片のため正確な時期等は明らかにしがたいが、おおよそ平安時代前半のものと思われる。

**S D01** 調査区北に位置し、南西から北東に走る、幅22cm、深さ5cmを測る浅い溝である。出土遺物としては、土師器などが出土しているが、細片のため詳細な時期は不明である。

**S D02** 調査区西に位置し、南西から北東に走る、幅22cm、深さ2cmを測る浅い溝である。出土遺物としては、土師器などが出土しているが、詳細な時期は不明である。なお、この2条の溝は、擾乱の暗渠と同一方向であり、包含層である灰褐色砂混シルト層上面で検出されている。のことから、一連の生活遺構が廃絶した後に、築かれた生産的な遺構に伴うものである可能性が高いものと考えられる。よって、今回検出された遺構の中でもっとも新しい時期に属する遺構である可能性が高い。

**S X01** 調査区中央部東に位置する長さ228cm、深さ12cmを測る土坑状のものである。殆どが調査区外となるため、遺構の形状は不明である。なお、S K02との切り合い関係より、S K02より新しい。出土遺物としては、土師器などが出土しているものの、細片のため正確な時期等は明らかにしがたいが、おおよそ13世紀代のものと思われる。

**ピット** 22基検出した。形状は、直径50cmから15cm、深さ50cmから15cmまで様々である。なお、P20からは、完形の土師器皿が出土している他、P10とP21には柱根が残存していた。また、柱根の内、P12とP21は、柱の先端が杭状に尖らして有るのに対して、P10とP6次調査の1本は、木の芯を外して木取りを行い、底を平らにして柱を据えているという違いがみられる。なお、P12とP21は、6次調査の1本と加えて、並ぶことが確認されている。



fig. 254 第2遺構面 全景

**第2遺構面**

第2遺構面は、暗黒褐色シルト層を掘り下げた下面の館暗青灰褐色シルト層上面で検出された遺構面である。

**S K 02** 調査区南に位置する幅162cm、深さ42cmを測る楕円形の土坑である。遺構からは、僅かに遺物が出土しており、弥生時代前期のものと思われる。

**S D 03** 調査区東端に位置する、幅136cm、深さ36cmを測る土坑である。殆どが調査区外となるため、全容は確認出来ないが、底に多量の弥生土器とともに窪み石や石棒などが出土している。遺物の時期から、弥生時代前期のものである。

検出時点では、溝状を呈していた為、SDとしたが、調査の進歩により、土坑と判明した。整理段階で遺構名の変更を要する。

**S D 04** 調査区南端に位置し、南西から北東に走る幅50cm、深さ21cmを測る溝である。殆どが調査区外となるため、全容は確認出来ていない。遺物の時期から、古墳時代中期（布留期）のものである。

**S X 02** 調査区西端に位置し、南東から北西に走る幅94cm、深さ57cmを測る溝である。殆どが調査区外となるため、全容は確認出来ないが、溝底に多量の遺物が出土している。遺物の時期から、弥生時代後期から庄内期のものである。

**ピット** 直径60cm、深さ54cm、以上の大型の柱掘形を持つもので、建物を復元するには至らないが、大形の建物が存在していたと推測される。周辺の調査でも幾つか確認されており、周辺に平安時代には、大型の建物群が存在していた可能性がある。

### 3.まとめ

今回の調査では、土坑とピットを検出した。隣接する上沢遺跡・6次調査の成果と合わせるならば、この周辺は、平安時代から鎌倉時代にかけての集落と考えられる。4次調査で、帶金具が出土していることとあわせて考えると、ある程度の身分のある人物の邸宅地であった可能性もある。この建物も数回立替えられたのちに、おそらく14世紀後半には廃絶し、耕作地へと変化したものとみられる。

また、弥生時代前期の遺構が確認されたことにより、周辺の調査成果とあわせて考えると、前期後半には、集落が形成されていたことが窺われる。このことは、隣接する大開遺跡との関連において、重要な意味を持つものと考えられる。

また、現在のところ、中期の土器や遺構は確認されておらず、隣接する楠・荒田町遺跡の、状況も加味するならば、一旦中期段階には、楠・荒田町遺跡周辺部が中心となって拠点集落へと成長するのかもしれない。その後、後期にはいり換点集落の解体と共に、また新たに、生活の場として利用されたものと考えられる。

## 1. はじめに

今回の調査地は、ほぼ同時期に調査を実施した第5次調査地の西隣地にあたる。第5次調査においては、平安時代から鎌倉時代に至る遺構面と弥生時代前期・弥生時代後期から庄内期・古墳時代中期の遺構が同一面で検出された遺構面の2面が検出されている。

今回は個人住宅の建設に伴うもので、計画建物の工事影響範囲と影響深度T.P.10.9mまで発掘調査を実施した。



fig. 255  
調査地位図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査においては、工事影響深度が第2遺構面まで達しておらず、第1遺構面までの調査となった。調査の結果、当調査地においても平安時代から鎌倉時代の遺構面が検出され、同時期の集落の状況を窺い知ることのできる資料を追加することができた。



fig. 256  
調査区全貌  
(右側は第5次調査地)

**第1遺構面** 第1遺構面は、灰褐色砂混シルト層の下面で検出された遺構面である。遺構としては、ピット12ヵ所・溝1条があり、平安時代から鎌倉時代にかけてのものが、同一面で検出されている。

**S K01** 調査区西隅に位置する長さ70cm、幅60cm、深さ43cmを測る円形の土坑である。出土遺物は細片のため正確な時期等は明らかにしがたいが、おおよそ平安時代のものと思われる。

**S D01** 調査区西に位置し、南西から北東に走る幅22cm、深さ2cmを測る浅い溝である。出土遺物としては、土師器などが出土しているものの、細片のため正確な時期等は明らかにしがたい。なお、この溝は、攪乱の暗渠と同一方向であり、包含層である灰褐色砂混シルト層上面で検出されている。このことから、一連の生活遺構が廃絶した後に、築かれた生産的な遺構に伴うものである可能性が高いものと考えられる。よって、今回検出された遺構の中でもっとも新しい時期に属する遺構である可能性が高い。また、隣接する調査区の上沢遺跡第5次調査において検出されているS D02に続くものである。

**ピット** ピットを22ヶ所検出した。形状は、直径50cmから15cm、深さ50cmから15cmまで様々である。なお、P20からは、完形の土師器皿が出土している他、P10とP21には柱根が残存していた。

**3.まとめ** 今回の調査では、土坑と溝、ピットを検出した。隣接する第5次調査の成果と合わせるならば、この周辺は、平安時代から鎌倉時代にかけての集落と考えられる。第4次調査で、銅製帶金具が出土していることとあわせて考えると、ある程度の身分のある人物の邸宅地であった可能性もある。この建物も数回立替えられたのちに、おそらく14世紀後半には廃絶し、耕作地へと変化したものとみられる。

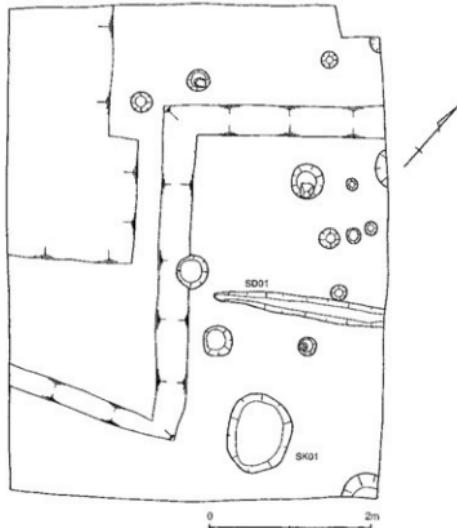


fig. 257  
調査区平面図（第1面遺構面）

## かみさわ 37. 上沢遺跡 第7次調査

### 1. はじめに

今回の調査は区画整理に関連した擁壁工事に伴うものである。調査地は、都市計画道路山手幹線拡幅工事に伴い実施した第3次調査地の北隣接地にある。第3次調査では、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代初頭、奈良～平安時代、中世と各時代の遺構が発見され、複合大遺跡であることが判明している。



fig. 258  
調査地位置図  
1:2,500

### 2. 調査の概要

基本層序は盛土、旧耕作土、旧床土、茶褐色砂質シルト層の包含層となる。見つかった遺構は、土坑2基、ピット3基、流路1条であった。

S K01は調査区外に延びるために全体の規模は不明であるが、円形と思われる土坑で、検出した直径は2.1m、深さ32cmであった。出土遺物から弥生時代後期の土坑である。

S K02は長径86cm、短径70cm、深さ24cmの楕円形の土坑で、S K01同様弥生時代後期の土坑と思われる。

流路1は緩やかに落ち込む流路で、幅4m、深さ54cmの規模で、底はほぼ平らである。埋土は上層が砂質シルトで、下層が砂礫層である。出土遺物は8世紀から10世紀に及んでいる。

### 3.まとめ

今回の調査地は第3次調査地に隣接しており、調査結果は第3次調査に追随するものであった。調査区はこれまでの遺跡範囲の境界に位置するが、今回の調査で遺跡の範囲はさらに拡がることが明らかとなった。

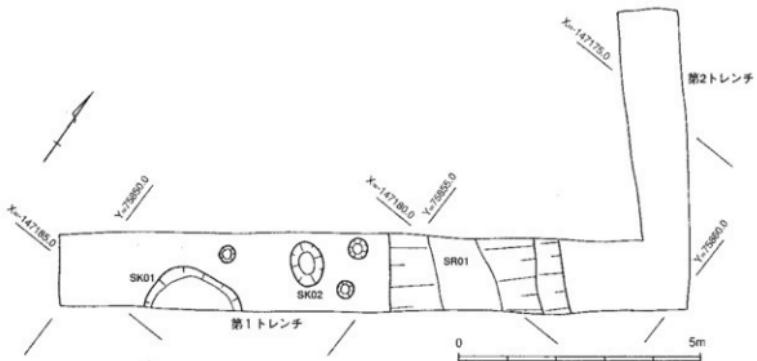


fig. 259 調査区平面図

## おかば 38. 岡場遺跡 第2次調査

## 1. はじめに

岡場遺跡は武庫川の支流である有野川の中流の左岸に位置し、地形的には低位段丘面上に立地している。本遺跡での過去の発掘調査例は少なく、平成6年10月に神戸電鉄岡場駅の北東側で民間の社員寮建設に伴う調査が数えられるのみである。調査では中世の焼土坑・ピット・自然流路が確認されている。

今回の調査は共同住宅の建設工事に伴うもので、神戸電鉄田尾寺駅の北東側約100mの位置である。微地形の観察によると、西側の丘陵裾には有野川に合流する小さな谷状地形があり、その谷状地形で段丘面上が区画されているため、有野川の対岸から見れば微高地の状況を呈している。標高はおよそ198mである。平成8年4月17日に実施した試掘調査によって埋蔵文化財の存在が確認されたため、共同住宅の基礎工事時に影響を受ける範囲に関して、発掘調査を実施する運びとなった。



fig. 260  
調査地位図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

調査区内には基礎の影響を受けない未調査部分があり、形状と配置によって調査範囲を便宜上12のトレーナーに分割して命名し、順次調査を進めていった。

## 基本層序

調査地点の現地表面は概ね平坦であるが、これは水田耕作土上に10~60cmの厚さで造成土が盛られているためである。造成土下の水田段差は3ヶ所4段分が確認できた。耕作土以下は床土、2層の淡褐色灰色系の旧耕作土と続き、粘土あるいは砂質土の地山となる。地山の色調や土質は場所によって大きく異なり、黒茶色・茶褐色・淡黄色・淡黄灰色等様々である。遺構面は地山の上面で、遺構の時期は概ね鎌倉時代頃と考えられるが、旧耕作土上から掘り込まれた江戸時代以降と考えられる遺構もある。

**検出遺構** 挖立柱建物と掘立柱塙の他に溝12条、土坑5基、浅い落ち込み2基、ピットを約20基検出した。これらの遺構概要は、表1～3とのおりである。

**S B01** 衍行3間以上×梁間2間の南北棟の掘立柱建物で、南側調査区外へ延びている。規模は衍行7.9m以上、梁間5.5mで、柱間は2.7～2.8mである。西側柱列中には、柱間をほぼ2等分する位置に間柱と考えられる柱穴が存在する可能性がある。柱穴の平面形は直径約20cmの円形で、深さ30～40cm、柱痕の直径約10cmである。

**S A01** 柱間は8間分を確認した掘立柱塙である。北側調査区外へ延びている可能性が高い。長さは16m以上、柱間は2mである。柱穴の平面形は直径あるいは長径20～50cmの円形あるいは梢円形である。水田床土を切り込んでおり、明治時代以降の可能性もある。

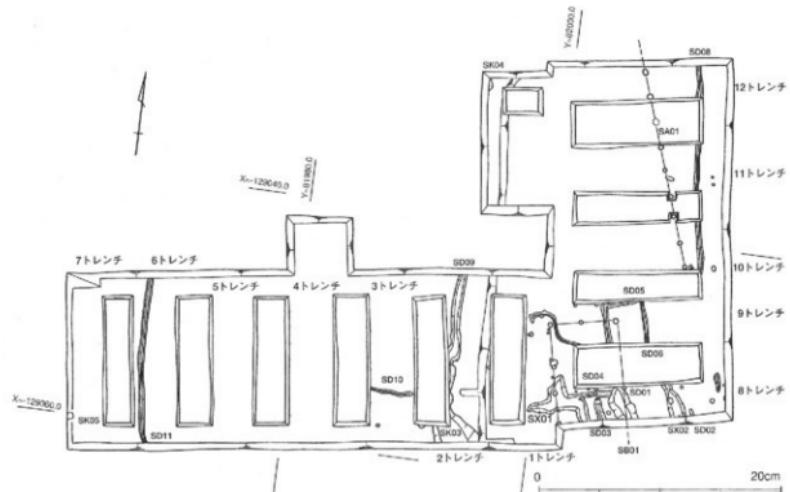


fig. 261 調査区平面図



fig. 262 調査地遠景



fig. 263 掘立柱建物 SB01

遺構名	規 模	検出状況	出土遺物
S D 03	幅60cm、深さ60cm、検出長2.2m	調査区外南側へ延びる。	須恵器・土師器
S D 04	幅40~50cm、深さ10cm、長さ10cm	S K01とS X01をつなぐ溝。	須恵器・土師器
S D 05	幅40cm、深さ10cm、検出長3.3m	S D 05とS D 06の間2.7mの空間が方形区画状になっている。	須恵器・土師器
S D 06	幅20cm、深さ5cm、検出長3.3m	未調査部分があるため完周して方形区画となるかは、不明である。	須恵器・土師器
S D 07	幅10~20cm、深さ10cm、検出長5.6m	蛇行する溝。	須恵器
S D 08	幅20~50cm、深さ10cm、検出長17.1m	江戸時代以降の水田段差の下に位置する溝。	須恵器・土師器
S D 09	幅50~60cm、深さ20cm、検出長9.8m	江戸時代以降の水田段差の下に位置する溝。	須恵器・土師器 瓦器・瓦
S D 10	幅20cm、深さ5cm、長さ3.5m	3トレンチ検出の東西方向の溝。	土師器
S D 11	幅20~30cm、深さ5cm、検出長14.0m	南側で少し東へ曲がる。	須恵器・土師器
S D 12	幅130cm、深さ30cm、検出長2.2m	S X01の東側から派生する。	須恵器・土師器 備前焼

表1 溝一覧



遺構名	規模・形状	出土遺物
S X01	南北3m、東西4m、深さ10cm 不整形。	須恵器・土師器
S X02	南北3.3m以上、幅60~130cm 深さ10cm。不整形。	——

表2 落ち込み一覧

遺構名	規模・形状	検出状況	出土遺物
S K01	南北3.3m以上、東西1.7m 深さ50cm。不整形。	中央に石が南北方向に並べられている。	須恵器・土師器
S K02	南北1m以上、東西0.4m以上 深さ20cm。形状不明。	大半が調査区外にあり平面形は不明。	須恵器
S K03	南北2.7m以上、東西3.1m以上 深さ90cm。形状不明。	堆上中層から大量の石が捨てられた状態で出土。	須恵器・土師器・備前焼 丹波焼・瓦質土器
S K04	南北1.3m以上、東西0.4m以上 深さ20cm。形状不明。	底面から石が9個捨てられた状態で出土。	——
S K05	直径0.6m、深さ60cm 不整円形。	直径40cmの曲物を埋設している。	——

表3 土坑一覧

**出土遺物** 遺物は土師器・須恵器・瓦器・青磁・白磁・瓦等が、遺構内と遺構面である地山上から28点入りのコンテナで合計3箱出土した。いずれも破片であるが、明らかに旧耕作土や旧床土上から掘り込まれた遺構から出土した遺物を除き、概ね鎌倉時代頃のものと思われる。瓦片は1・2トレンチからのみ出土している。他には柱穴から出土した柱根が4点、土坑SK05から出土した曲物側板の残欠が1点ある。また、11トレンチの地山上からは弥生時代頃と思われる石礫が1点出土した。

**3.まとめ** 過去の発掘調査例が少なく、実態がまだ良く判っていない岡場遺跡であるが、今回の調査で鎌倉時代頃の掘立柱建物・溝・土坑・ピット等の遺構が確認できた。掘立柱建物は1棟しか確認できなかったが、調査地点が集落の内部であることは確実で、近隣には集落の中心が存在するものと思われる。

今回1・2トレンチからのみ瓦が出土し、他からは全く出土していない。瓦当面を有する破片が出土していないこと、出土点数が少ないなどの点はあるが、近くに瓦葺きの建物が存在した可能性が考えられる。

岡場遺跡は有野川右岸の低位段丘面上に細長く広がっているが、これまで遺跡内で各種の開発に伴って実施された試掘調査で、埋蔵文化財を確認できなかった地点もある。今回の調査地点は微高地状を呈すが、西側に小さい谷状地形があることから、文化財が確認できなかった地点はこのような谷状地形に相当する場所と推察される。したがって遺跡内の居住城は、谷状地形で幾つかに分割された段丘面上に、有野川に沿って点在していた状況が想像される。

## ながたじんじやけいだい 39. 長田神社境内遺跡 第6次調査

## 1. はじめに

長田神社境内遺跡は、刈萱川によって形成された標高約14~17mの沖積地上に位置している。これまで、市街地の再開発事業や道路拡幅に伴い、5次に及ぶ発掘調査が実施されている。その結果、縄文時代~中世にいたる集落が確認されている。中でも、宮川小学校の東の南北方向の道路都市計画道路長田線の拡幅の際の調査では、弥生時代後期から古墳時代の竪穴住居が比較的密集して確認されている。また、鎌倉時代の井戸や掘立柱建物も多数確認され、比較的規模の大きい集落がこの地に営まれていたことを窺わせている。

今回の調査は、阪神淡路大震災により被害を受けた宮川小学校の校舎全面改築に伴い、新校舎が建築される部分のうち、遺跡に影響を及ぼす範囲について発掘調査を実施した。

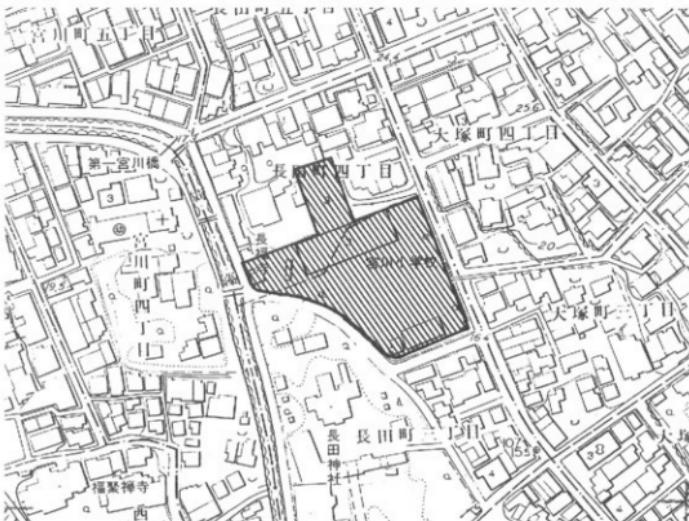


fig. 268  
調査地位図  
1:2,500

## 2. 調査の概要

## 基本層序

調査地は、北から南へと緩やかに傾斜する地形で、小学校用地となる際に整地を行っていただけ、南側では整地層が厚く、旧小学校の基礎も造構面から浮いた状況で、遺跡への影響は少なかった。

基本層序は古墳時代の自然河道（S R01）の北と南で段差があり、北側では造構面が1面、南側では造構面が2面確認されているため、ここでは南側を基準としてみていく。第1層（T.P=17.6m）がグランド整地層及び搅乱、第2層（T.P=16.1m）が旧耕土、第3層（T.P=15.9m）が古墳時代から中世の遺物包含層（灰黄色砂質シルト）で、この上面が第1造構面になる。第4層（T.P=15.8m）以下は、古墳時代中期以前の河道の堆積土で、この上面が第2造構面になる。これ以下は主として弥生時代後期の遺物が出土する自然河道であるが、遺物の出土量は多くない。

**第1遺構面** 掘立柱建物1棟、井戸1基、土坑18基、溝状遺構16条、不定形落ち込み・性格不明遺構5基、ピット104個が検出されているが、その多くは調査区外北側に延びている。

**掘立柱建物** 東西2間、南北3間以上（調査地区外に延びる）でやや東へ振った方向の建物である。遺物の出土が少ないため、建物の時期については判然としないが、中世頃と考えられる。

**井戸SK05** 検出段階で集石土坑のように確認されたものである。長径2.5m、短径2.1mの楕円形のプランの中に拳大から人頭大の自然礫が投棄されていたものである。投棄された礫を除去すると、内法で直径1.2m、深さ1.3mの石積みの井戸が確認された。井戸底には、曲物などの水溜めの施設は確認されなかった。井戸の時期については、投棄された礫の間から少量の土器が出土しており、室町時代の半ばまでには埋められていたと考えられる。

**土 坑** 磚が投棄された状況で検出されたものが4基確認された。落込みSX04も、磚を伴っている。磚を伴う土坑は、SK04, 09, 13, 15, 19である。SK04は、径60cm、深さ60cmの円形の土坑であるが、遺物は出土していない。磚を伴う遺構の多くが室町時代前半段階に集中していることから、この遺構についても同時期の頃のものではないかと推定される。

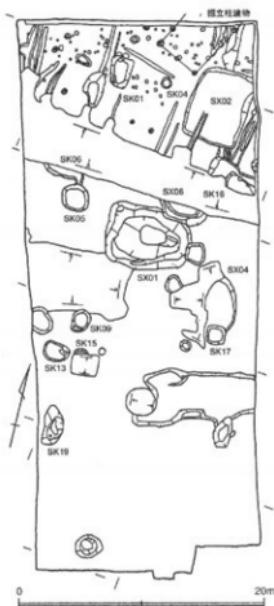


fig. 269 第1遺構面 平面図



fig. 270 調査区漁港（第1遺構面）



fig. 271 第1遺構面 全景

S K01 不整形の土坑である。土坑底からは、曲物の底板1点、板材1点と焼土塊が出土している。焼土塊には、一部面をもつ部分があり、竈などの火を受ける部分に用いられたものであったものと考えられる。埋土中には、炭片や灰が多量に含まれており、焼土塊の使用方法を考えていくうえで考慮すべきものである。時期は、室町時代の前半のものである。

落ち込み

S X01 落ち込み S X01は、長径7.0m、短径5.2m、深さ1.5mを測る。埋土からは多量の土器片が出土しているが、埋土の最下層付近から底部のない土師器の羽釜が1点出土していることから、鎌倉時代の後半の遺構であったと考えられる。遺構の性格としては、井戸の井戸枠などの抜き取りなどとも考えられるが判然としない。S X02は長径6.2m、短辺4.8m、深さ40cmの長方形の落ち込みである。遺構の性格は不明であるが、出土した遺物からこの遺構の時期は、室町時代前半段階のものと考えられる。

S X04 S X04は、南北5.0m以上、東西2.6m以上、深さ25cmの落ち込みである。内部は人頭大の礫（石臼などの石製品も少量含まれる）が投棄され、その周囲には焼土や炭層の括がりが認められた。投棄された礫を除去すると一部の礫が「コ」の字状に配置され、その内側にのみ焼土や炭層がみられ、礫も火を受けて赤変していることが判明した。土器類の出土は少ないが、竈などの火を使用する遺構が存在していた可能性が高いものと考えられ、S K01の焼土塊との関連もうかがわれる遺構である。時期は室町時代前半と考えられる。



fig. 272 土塹 SK01



fig. 273 井戸 SK05



fig. 274 落ち込み SX04



fig. 275 土坑 SK04

**第2遺構面** 井戸2基、土坑33基、溝状遺構5条、不定形落ち込み・性格不明遺構5基、自然流路1条、ピット118個が検出されている。

**井戸 S E01** 井戸 S E01は、長径1.8m、短径1.6mの不整梢円形の掘形の中に、一辺80cmの方形の井戸枠を組むものである。深さは1.0mである。井戸の底に曲物などの水溜めの施設は確認できなかった。井戸枠の遺存状況は良くないが、井戸枠継板材・杭とともにコウヤマキを使用している。時期は、鎌倉時代前半のものである。

**S E02** S E02は直径2.4mの円形の掘形の中に、上面内法で直径1.0mの円形の石積みの井戸を備えるものである。井戸底部に曲物などの水溜めの施設は確認されていない。遺物は鎌倉時代前半のものが出土しているが、S E01よりやや後出するものである。また、石積みの内外から小型の曲物底板が5点出土している。

**土 坑** 土坑は33基検出された。S K47は調査区の南側で確認され、調査地区外へのびる遺構であるが、現状で幅1.1m、長さ1.0m以上の方形のもので、深さ25cmを測る。埋土の最上層から土師器の小皿が完形品で10数個体出土している。時期は鎌倉時代前半である。

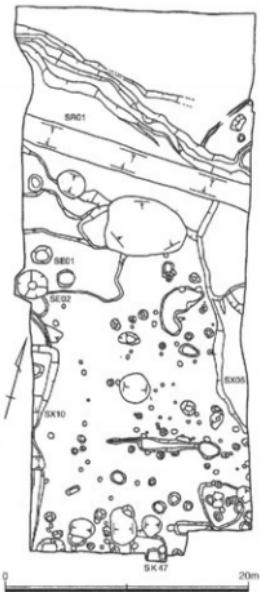


fig. 276 第2遺構面平面図



fig. 277 調査区全景

**落ち込み** 落ち込みは5基確認された。SX10は「L」字状に石垣が確認された遺構である。長辺で7.0m、短辺で1.5m分が確認されているが、西側が調査区外へのびるために全体規模は不明である。石は最大で3段が積まれているが、本来はもう少し積まっていたものと推定されるが、後世の削平のため削られたものと考えられる。北側の短辺部分は緩やかな階段状のようにも観察することができ、池のような施設が存在していた可能性が高い。この遺構は第2遺構面で検出されたが、本来は第1遺構面で確認できる遺構であったことが断面観察の結果明らかになっている。

SX05は、調査区の中央部の東端で確認されたものである。東側へ落ち込んでいくもので、自然河道SR01よりもその切り合い関係から新しいものであるが、大きな時期差はその出土遺物からは認められない。古墳時代中期の遺構である。東側にあると推定される自然河道の西側の肩部の可能性が高い遺構である。埋土はすべて砂層である。

**自然河道** 自然河道SR01は東から西へ向かって流れる河道である。最大幅10m、深さ最大1.5mを測る。河道底部で土師器が比較的集中して出土している。時期的には須恵器が出現している段階の遺物と考えられるもので、古墳時代中期後半の河道と考えられる。



fig. 278 井戸 SE01



fig. 279 土坑 SK47 滅失物出土状況



fig. 280 井戸 SE02



fig. 281 SX10

### 3. まとめ

今回の調査では遺構面を2面確認することができた。第1遺構面は、主として室町時代前半段階の遺構を主体とし、第2遺構面は古墳時代中期後半から鎌倉時代前半段階の遺構を主体としている。

第1遺構面に伴うと考えられる遺構は、第2遺構面のSX10を含めて、礫をその埋土の中に伴うものが多いが、調査地区内の遺構面を構成する土層の中にはこのような礫は含まれておらず、いわゆる搬入礫と呼ばれるものに相当する。これらの使用方法は、SX10のように池？の石垣として使用されたり、井戸に使用されたり、竈の一部に使用されたのではないかといったことが推定されている。また、この後調査を実施した給食棟部分の調査においても礫を多様した池などが確認されており、室町時代の一般集落の一部と考えるよりも、むしろ南に隣接する延喜式内社の長田神社や、西側に隣接する長福寺などとの関連性を、今後考慮して検討していく必要があろう。検出された掘立柱建物については中世のものの可能性が高いが、この周辺には平安時代前半の柱穴も確認されていることから、中世をさかのばる遺構である可能性も否定できないものと考えられる。今後の検討課題の一つである。

第2遺構面では、古墳時代から鎌倉時代前半の遺構・遺物が確認されているが、その主体となるものは鎌倉時代前半のものである。井戸については、その出土遺物からSE01からSE02への変遷がたどれ、その後、第1遺構面のSK05へと作り替えられていく。その中で、板材による井戸枠から石積みの井戸へと変化し、その中でもSE02からSK05へは小型の礫から大型礫の使用といった変化をみることができる。しかし、そのいずれにおいても水溜め用としての曲物は掘えられていないといった共通した特徴も認められる。地域的な状況も考慮する必要がある、この地での井戸作りの変遷を知る上で貴重な資料となるものと考えられる。古墳時代の遺構は多くないが、河道内からは土器がまとまって出土していることから、この近くに当時の集落が展開している可能性が高く、第4次調査で確認された集落がこれに該当することも考えられる。

第2遺構面より下層については、弥生時代後期の遺物を主体として含む河道が存在している。また、上層の包含層からは、柱状片刃石斧も出土しているなど、この周辺には弥生時代中期から後期の集落が存在する可能性も高い。

ながたじんじやけいだい  
40. 長田神社境内遺跡 第7次調査

## 1. はじめに

長田神社境内遺跡は、六甲山南麓に広がる平野部の西端近くにあたり、東西両側を丘陵に挟まれた刈藻川が形成した沖積地及び西側段丘上に立地している。これまでの調査の結果、縄文時代晚期から近世の複合遺跡であることが判明している。

当該地において、集合住宅新築の計画が進捗したが、当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地にあたることから、平成8年5月14・22・23日に神戸市教育委員会において事前の試掘調査を実施した。その結果、全面に遺跡の広がりが確認されたため今回の調査に至った。



fig. 282  
調査地位図団  
1:2,500

## 2. 調査の概要

今回の調査では、弥生時代～近世の遺構が検出されたが、基本的にI～III期の3時期に大別できる。第I期は弥生時代中期から古墳時代後期、第II期は中世、第III期は近世にあたる。さらに各時期は層序、出土遺物及び遺構の重複関係等によって細分が可能である。

## 調査の方法

また、当該地は近世の長田神社神官屋敷地推定地にあたり、第III期の遺構がこれに相当すると思われる。

工事で遺構が破壊される部分にのみ調査の対象としたため、調査区内を建設工程との関係から便宜的にA～G地区に分け、さらに建物の基礎の位置関係からB地区を1～5区、C地区を1～8区の小区に细分し、工事の進捗にあわせて地区ごとに調査を実施していく。



fig. 283 調査区段定図

**層序** 調査区西端は段丘状に一段高くなっているが、概して対蓬川による河川堆積であり、西から東に向かって緩傾斜する粘土と砂の互層による堆積が認められた。なお、C地区及びG地区では推定神官屋敷地に伴うと考えられる近世の整地層が確認された。

**検出遺構** 今回の調査では各地区によって異なるが、基本的に3~4面の遺構面を検出した。検出した遺構面は3時期に大別でき、以下時期別に概略を記す。

**第I期の遺構** 第I期は4時期に細分できる。I-1期は弥生時代中期、I-2期は古墳時代前期、I-3期は古墳時代中期、I-4期は古墳時代後期にあたる。

**I-1期** 土坑と自然流路が検出された。ともにC地区に位置し、土坑は段丘状の高まりの上にある。自然流路は段丘裾部において一部を検出したのみであるが、調査区のはば全域(C-8区以外)が当該期の流路であったと考えられる。

**I-2期** 自然流路と掘立柱建物が検出された。掘立柱建物はC-8区の段丘状の高位部で検出した。 $2 \times 2$ 間以上の縦柱建物であり、倉庫であった可能性が高い。自然流路からは、多量の土器(布留式並行期)が出土し、周辺部に当該期の集落の存在が推定される。

**I-3期** E地区東側において溝が検出された。この溝から古式の須恵器や土師器が出土した。

**I-4期** E地区東側とG地区東側において自然流路が検出された。

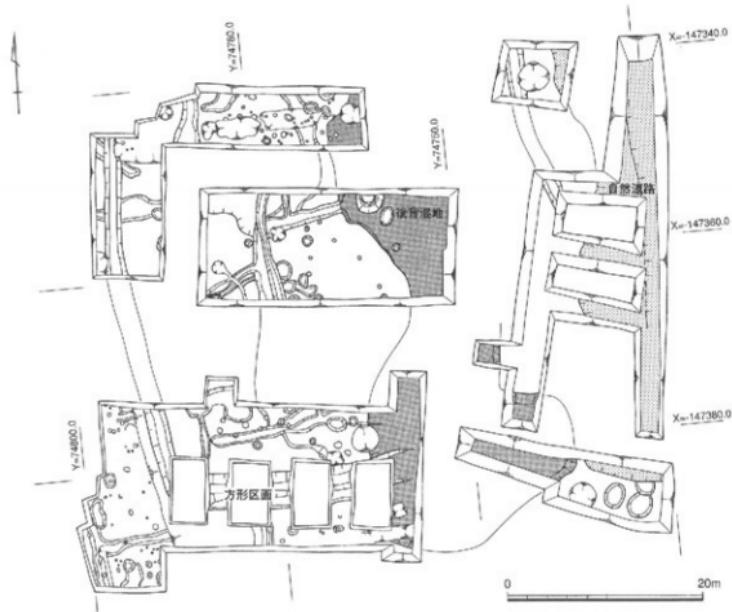


fig. 284 第I期(弥生時代中期~古墳時代後期)遺構面平面図

**第Ⅱ期の遺構** 第Ⅱ期は4時期に細分できる。Ⅱ-1期は13世紀中頃～14世紀前半、Ⅱ-2期は14世紀中頃、Ⅱ-3期は14世紀後半～15世紀中頃、Ⅱ-4期は15世紀後半～16世紀初頭である。

まず、全Ⅱ期を通しての遺構としては、旧茹藻川の後背湿地跡がある。B-2区、C-1～4区、E・G地区にかけて検出され、調査区のはば中央部がこれにあたる。上下2層に分層が可能で、下層部がⅡ-1期に、上層部がⅡ-2～3期に相当し、Ⅱ-4期にはC地区の一部を除いてほぼ全域が埋没していたようである。上層からは多量の土器が人頭大の礫とともに廃棄された状態で出土した。また、自然流路がA・B・C-1・D地区にわたって検出され、護岸の列石がみられた地区（A・B地区）もある。さらに、Ⅱ-2～3期にかけての柱状のピット群がE・G地区で検出された。E地区のピットの中には柱根が残るものもある。

各小時期区分の主要遺構は次の通りである。

Ⅱ-1期

C-8区で拳大～人頭大の礫を廃棄した土坑を検出した。

Ⅱ-2期

E・F・G地区で溝及び落込み状の土坑を検出した。

Ⅱ-3期

C-1・2区、D・E・G地区で溝と土坑を検出した。この内G地区で検出した溝はL字状に屈曲し、C-2区の溝につながる。D地区の溝からは多量の土器が礫とともに廃棄された状態で出土した。

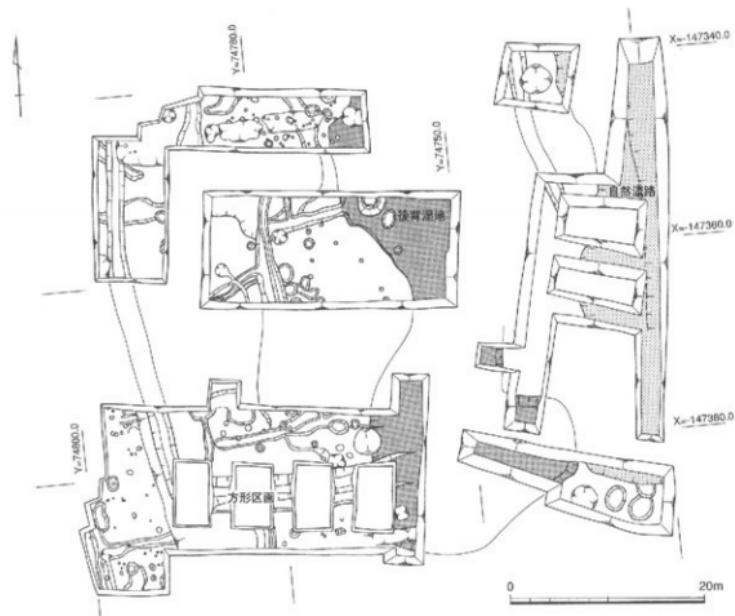


fig. 285 第Ⅱ期（13世紀中頃～16世紀初頭）遺構平面図

II-4期 C・E・F・G地区で溝、G地区で石組井戸を検出した。C・F地区で検出した溝は一連のつながった溝で、正方位の方形の区画溝と考えられる。南側はV字形に掘られていることから一般の区画溝とは考えがたく、その時期からした「堀」として機能し、防御的目的とした溝であったと考えられる。この方形区画は後述する第III期の神官屋敷地にも踏襲されている。E・G地区で検出されている溝は石組の溝である。



fig. 286 C地区 第1溝横面 全景



fig. 287 A・B地区 第1溝横面 全景



fig. 288 C-8地区 全景（I期の溝が主体）



fig. 289 C-2地区 全景（II期の溝が主体）

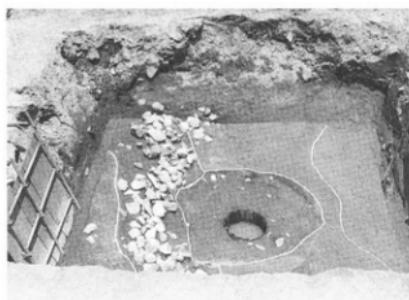


fig. 290 D区 第2溝横面 全景（II期の溝が主体）



fig. 291 E地区 全景

**第Ⅲ期の遺構** 第Ⅲ期は3時期に細分でき、全般を通じ長田神社の神官屋敷に伴う遺構と考えられる。Ⅲ-1期は17世紀中頃～18世紀前半、Ⅲ-2期が18世紀中頃～18世紀後半、Ⅲ-3期が19世紀以降に相当するが、明確な時期区分は困難である。

**建 物** 建物・園池・井戸・石組溝・水琴窟・埋甕及び屋敷地を囲む築地塀等を検出した。建物はC地区で検出し、基礎部を碌石で方形に囲んだもの2棟と碌石のみの建物2棟があり、碌石のみの建物はⅢ-1期に属し概して古い。C-2区東側の建物は2回以上の建替えもしくは修復が行われ、その規模から神官屋敷の中心的建物であった可能性が高い。

**園 池** 園池はC地区とG地区で2ヶ所検出した。G地区中央部やや東よりで検出した園池はⅢ-1～2期に営まれたもので、最下層から箸等の多量の木製品が出土した。もう一つの園池は汀線を石組で護岸したものでⅢ-2期に属する。C地区の園池はⅢ-3期に属し、挙大の礎を詰めている。

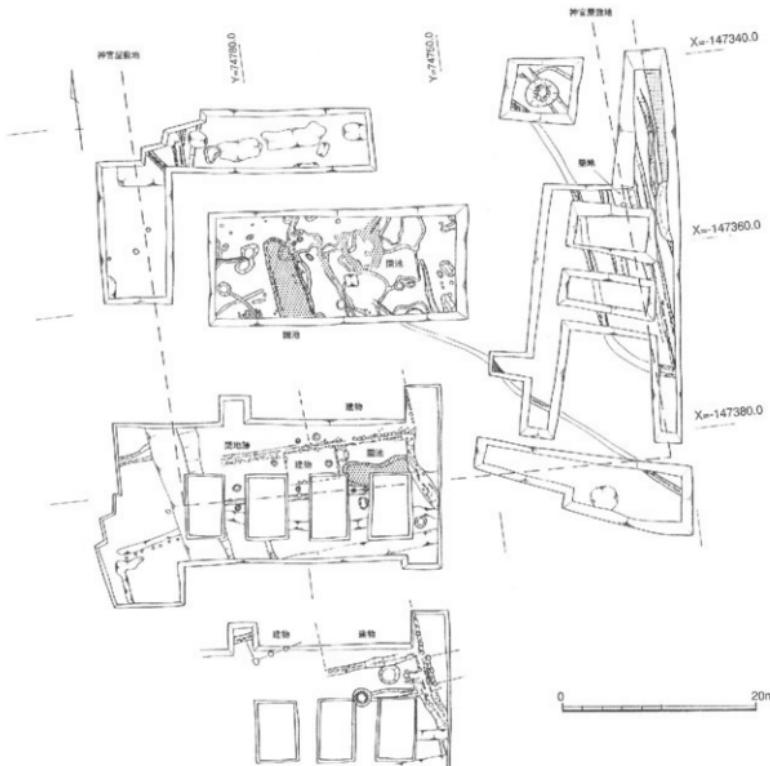


fig. 292 第Ⅲ期（17世紀以降）遺構平面図



fig. 293 C地区 第1造構面 全景（Ⅲ期の造構が主体）



fig. 294 G地区 第2造構面 全景（Ⅲ期の造構が主体）

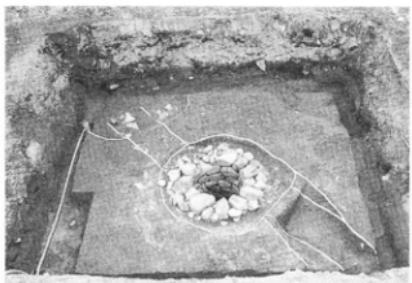


fig. 295 D地区 第1造構面 全景（Ⅲ期の造構が主体）



fig. 296 D地区 第1造構面 石組井戸

**井 戸** 井戸はC地区で2基、D地区で1基、G地区で1基の計4基を検出した。C地区で検出した井戸は石組のものと瓦（上部）と桶（下部）を重ねたものであり、前者がⅢ-1期、後者がⅢ-3期に属する。D地区的井戸はⅢ-2～3期、G地区的ものはⅢ-3期に属するもので、ともに上部が石組、下部が桶で構成されたものである。

**石組溝** 石組溝は全地区で検出した。建物や築地塀に伴う雨落ち溝、園池への導排水路がある。また、石組溝ではないがⅢ-3期に属するものとして石組の暗渠が多数検出された。

**土 坑** 土坑はⅢ-1期に属するものがG地区で、Ⅲ-2期のものがC-2区で、Ⅲ-3期のものがB-1区で検出された。この内G地区的土坑は多量の土器・陶磁器・木製品とともに金メッキを施した簪（196P. fig.300・444P. fig.763-764）が1点出土した。水琴窟はG地区北側中央部でⅢ-2期に属するものを検出した。埋甕はC-5区で検出し、Ⅲ-3期に属する。

**築 地** 神官屋敷地を区画する築地及び塀はA・B地区で南北方向の築地とそれに伴う石組の雨落ち溝、C-2区で同じく南北方向の築地の残欠を検出した。また、C-5～7区で東西方向の柱穴状のピット列とその南側に並行して素掘り溝を検出した。おそらく木塀とそれに伴う雨落ち溝であろう。さらに、A・B地区的築地と旧苅藻川との間に犬走り状の造構を検出した。

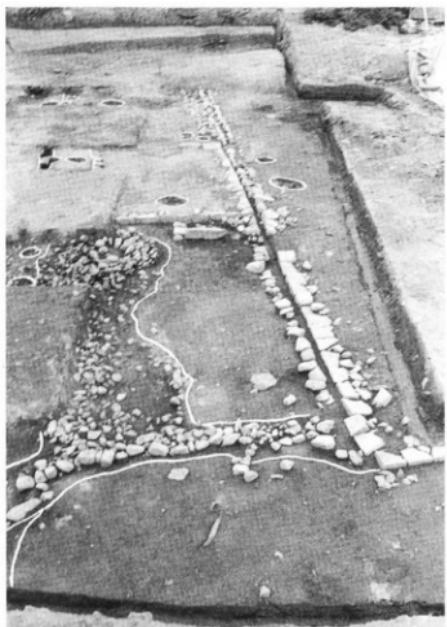


fig. 297 C地区 推定神官屋敷跡



fig. 298 同左の圓池



fig. 299 產物基礎部分の石組

**出土遺物** 遺物はコンテナにして約100箱出土した。土器類、瓦類、石製品、木製品、金属製品、自然遺物がある。土器類には弥生土器・須恵器・土師器・瓦器（瓦質土器を含む）・陶磁器の各時期のものがあるが、大半は古墳時代前期と中世及び近世の土器・陶磁器類である。特に中世の土器は各遺構ごとに一括で出土したが多く、今後この地域の基準資料になりうるものである。皿・羽釜・鍋等の在地系土器、東播磨系須恵器・瓦器類・瓦質火鉢・すり鉢・備前系のすり鉢・大壺・青磁・白磁等がある。

弥生土器は中期後半のものが主であるが出土量は少ない。古墳時代前期の土器は希留式並行期に属する。近世の陶磁器は伊万里や波佐見・唐津・江永等の肥前系を主に丹波・備前・信楽・瀬戸系のものが若干ある。少量ではあるが中国製の青花などもみられる。瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の通常の瓦以外に中世（II-3期）に属する瓦磓が1点出土している。石製品には砥石・石臼・五輪塔（空輪部）がある。石臼・五輪塔はIII期の石組溝に転用されていたものである。木製品はその大半がG地区III期の圓池から出土したもので、約200本の箸をはじめ曲物・板状木製品等がある。また、II期に属する漆器碗と柱根が少量出土している。金属製品には古銭と鉄釘・簪がある。簪は金メッキに線刻文様を施したもので、III-1期に属する。自然遺物は種子類であり、概してII期の後背湿地部から出土したものである。